252
289

始

8. 5.15

22

文學博士　春山作樹　著

教育學概論

帝國學校衛生會發行

太正
13.8.22
內交

282-289

序說

著者は多年教育學の研究に沒頭してゐる者で、講演又は雜誌に於て所見を發表したことは幾回か自分にも記憶しない程であるが、未だまとめて一部の教育學として發表したことはない。其は餘暇を有しなかつた爲めである。此一篇は大正十二年文部省學校衛生講習會で試みた講演である。限られた時間に於て學校衛生關係者に對して述べたものであるから教育學概論としては盡さない所のあることは勿論で、唯教育學の輪廓を示したものに過ぎない。是を刊行するは實は本意ではない。然し著者に對して其所見をまとめて發表する樣にと要求せられる人が少くない。其等の人に對しては此一篇も教育上の諸問題に就いて著者が如何なる見解

を有するかを示すことを得るであらう。故に帝國學校衛生會の希望に應じ之を刊行することを承諾した。

大正十三年六月

東京にて

春山作樹

内容目次

第一章　教育……一

第一節　精神物理體……二

第二節　受—思慮—與……三

第三節　體驗……七

第四節　體驗の身心に殘す變化……八

第五節　反復と意識の減退—無意識的活動と意識的統制……一〇

第六節　體驗の擴充及び統一……一七
第七節　理性と感情……二一
第八節　環境の整理と示唆……二九
第九節　習慣の構成及び改造……五二
第十節　人格の同時及び繼續的統一……五四
第十一節　自我觀念―自我觀念の發達……五六
第十二節　自我は體驗の集積……六〇
第十三節　自我と世界……六三
第十四節　中心點の選擇……六五

第十五節　個人主義、國家主義と國際主義……六九

第二章　教育と文化……八七

第一節　選擇及び價値……八七
第二節　教育と文化……八九
第三節　教化の階級的發展……九三
第四節　普通教育と專門教育……一一
第五節　職業教育……一四
第六節　階級か素質か……一四

第三章　教育事業及機關の分化……二九

第一節　普通兒童と異常兒童……二九
第二節　家庭……三一
第三節　初等教育……三八
第四節　中等教育……四七
第五節　中間教育……五八
第六節　師範學校……六〇
第七節　異常兒童—教育病理學及治療教育學……六五

第八節　成人教育……八四

第四章　其他重要なる二三の問題……九一

第一節　衞生教育……九一
第二節　個別的教授及自發的學習……一〇〇

教育學概論

文學博士　春山作樹著

第一章　教育

教育とは如何なる仕事を爲すものであるか。之を說くためには、一體人間といふものは如何なるものであるか、又如何なるものであるべきかといふ二つの大なる問題が眞先に出て來る。卽ち教育は現在の人間を捉へて斯くあるべき人間とならしめるもので、現實の人間と理想の人間との其の間に教育の事業が存在するの

である。さてこの二つの問題は世界始まつて以來今日まで十分に解決の遂げられない大なる問題で、それについて十分徹底した解釋を與へることは到底出來ないことであらうと思ふ。併しながら、教育學を說く以上はどうしても其の問題に觸れて來なければならぬ。そこで少くとも吾々の立脚地を明かにするために、先づ其の問題から入つて行かなければならぬと思ふ。初めには哲學上の問題は避けて常識或は經驗科學的立場から此の問題に入り、徐々に說を進めて行かうと思ふ。

第一節　精神物理體

人間なるものは身體と精神の二者が結合して、種々微妙なる活動をして居るものであることは、何人も疑はないところである。そこで自分は之を精神物理體といふ語で表はして置かうと思ふ。精神物理といふ語は實驗心理學が始まつた頃曾て用ゐられた名稱で、その場合には特殊の意味が含まつて居つたのであるが、自分

のは其の意味に拘らず、唯だ常識で考へた通り、身體と精神とが結附いて出來て居るものであるといふ意味に此の語を用ゐて置きたいと思ふ。

第二節　受——思慮——與

精神物理體或は精神物理的有機體の人間が如何なる活動をして居るかといへば、之を大別して二にすることが出來ると思ふ。其の一は外に原因があつて內に其の結果の及んで來る働きである。それは何を意味するかと云へば眼で物を視、耳で音を聞き、舌で味を判別するが如き働きを意味して居る。その働きは單にそれのみで終るものではない。其の眼、耳、舌に光、音響、味が觸れて生じたところの變化は、吾々の神經纖維を通じて中樞に及んで、其の音が何の音であるか、其の光が何の光であるかを吾々は判別することが出來る。そを意識するときにはどうなるかといへば、曾てピアノの音を聞いた人であれば今の鳴つて居るのはピ

アノであると考へる、此の場合には元から有つて居るピアノの音といふ記憶と今外から入つたピアノの音といふものが結附いてこれはピアノの音だといふ風に考へるのである。さうすると、外から入るところのものは内でそれを迎へて、それと融合して、それを處分するものがなければならぬことになる。處分する働きは自然に其處に惹起されて來るのである。而してそれが自分に取つて快きものであるか、不快のものであるかを吾々は意識し、それに對して自分がどういふ風にするか、自分の執るべき何等かの態度を定めることになる。斯樣に先づ外から入つて來た働きが内に及んで來るが、次には其の内に及んだ働きが更に外に向つて何等かの反動として現はれて來る。例へば舌の上に苦味丁幾を一滴落すと苦いといふ感がする、若し苦味丁幾を知つて居る人ならば之を苦味丁幾であると考へる、その時に之は厭なものであると考へれば吾々はそれを斥ける、けれども若し其の人が何か病氣に罹つて居つて苦味丁幾を嚥まなければならぬ人であれば厭やだと

思つてもそれを嚥むこともあらう、其の飲むとか吐出すとかいふことは卽ち外に對する働き、卽ち反應する働きであるから、受けるといふことに對して自分は與へるといふ名を附けて置きたいと思ふ。卽ち外に對してどういふことをするか、反應の態度、それを與へるといふことにして置く。そこで吾々の一生涯の仕事は數限りないものではあるが、之を大別すると、受——與、この何れかの仕事に屬することになると思ふ。

偖て苦味丁幾は苦い、苦い物は嫌ひだから吐出してしまう、或は苦くて嫌だけれども之を嚥まなければ病氣が治らないと考へて嚥む、此の事は何處で決まるかと云へば、外から入つて來たものと内から外に出るところのものを結附けるところに何かの働きがなければならぬ。それを名づけて吾々は思慮というて居る。常に心理學で用ゐて居る語を借りていへば、外から内に這入つて來る間に感覺、知覺といふ働きが行はれて居るのである。其の次の思慮は何をするかといへば、之

は非常に複雜なる働きが其の中に含まれて居る、卽ちそれが何物であるかを判別する、それが苦味丁幾であることを判別する爲めには、旣に苦味丁幾なるものを知つて居らなければならぬ、其の記憶の働きが含まれて居る、之がどうなるかといふことを考へるときには、意志の働きが現はれて來る、之を嚥むことが自分の健康の爲めに必要であると考へるならば、それを嚥むといふ決斷をしなければならぬ。其の決斷といふことになると、心理學者は之に意志といふ名を附けて居る、而して意志が現はれて來ると運動神經に刺戟を與へてそれを嚥下するといふ働きが行はれる、此の場合には筋肉が關係して居る、而してそれを嚥下した結果は、更に一方に歸つて來て、更に新たなる受の働きとして現はれて來る。吾々の生活の中に現はれて來る複雜の働きが外から入つて來て、それに對して自分がどういふ所置をするかといふ決斷をして實行する、實行の結果は更に自分に感ぜられて自分が知るといふ風になつて、內から外、外から內、內から外といふやうに一つ

の環を描いて循環するやうになつて居る。その間に心理學上說かれて居るところの種々の働き、記憶、想像、判斷、決意とかいふやうな種々の働きが含まれて居る。感覺の働き、筋肉の働き、一切の吾々の精神活動が含まれて居るのみならず、身體の活動も含まれて居るのである。

第三節　體　驗

さういふ風に含まれて居る、卽ち一つの環を描いて居るのを全體として、見たり聞いたりして、自分がそれに對してどういふ風にするかといふことを決斷し實行して、自分の實行の結果が又自分に解つて來るといふことになる、其の全體を名づけて體驗というて置かうと思ふ。體驗といふ語は、近來頻りに人が使ふことになつたが、元來獨逸の Erlebnis といふ語を反譯して用ゐて居るのである。此の體驗といふ言葉は、吾々の使ひ慣れて居る經驗といふ語よりは一層具體的のも

のである。何故ならば、普通經驗といふ場合には受けるといふところまでの働きしか其の中に含めて考へて居ない、是は何であるかといふところまでで止めて置いて、それをどういふ風に處置するか、どこと比較して考へるかまで行つて居らぬのが普通である、隨つて從來使つて居つた經驗といふことは、純粹の知的活動と解釋して居る、ところが自分は受、思慮、與の全體のものを纏めて體驗といふ名を附けたから、意志の活動も其の中に含まれることになる。苦い物は嫌だ、或は嫌であるけれども病氣の爲めに嚥まなければならぬといふが如きことも含まれて居る。吾々の稱する體驗は、知識と感情と意思とを悉く含んで居る働きである、吾々の生活の一部分を具體的に纏つたものとして、其の中に種々の働きが含まれて居るといふことになるのである。

第四節　體驗の身心に殘す變化

さうすると、如何なる結果が後に殘つて來るかといふことが次の問題となつ來る。吾々が一度或る體驗をすると、それは其場限りで後に結果、或は影響を殘さないものであるかと云へばさうではない。吾々は例へば一度蠟燭の火を摑んで熱いものであると感じると、再び其物に遭遇するとそれを避ける、又美味いものを食べて體驗すると、再び其物に遭つた時にはもう一度食べて見たいと思ふ。一度爲した體驗は其場限りで消えるものではなくして、後の吾々の體驗に對して影響を與へるものである。其の影響を與へることが既に單に心理學的にのみ說明することの出來ない一つの現象であると思ふ、卽ち精神の側からのみ之を見ることの出來ないものと思ふ。それは何故であるかといへば、こゝに思慮といふものがあつて、これは斯うする方が宜いとか、斯うしない方が宜いといふことを定めると、その時に吾々の腦神經系統の中に如何なる働きがあるかといへば、之を爲すべしと命じた時、それを意識した時には、その考を成立たせて居る物理的の基礎があ

る。とにかく神經の中に起つて居る或る變化が運動神經の方に流れて行くわけである。若し、之は爲すべからざる事と決定すると、其の流が停められるわけである、進んで流れることもあり、或る場合には其處で停まることもある。其の神經に起つて居る變化が實行の方に移つて行く場合が、運動神經の方に傳つて居る場合である。其の神經の内に起つた變化といふものは、後の活動に對して影響を與へるものである。

第五節　反復と意識の減退——無意識的活動と意識的統制

吾々の活動といふものは、同じ事が繰返されゝばされるほど、その同じ道を辿つて吾々の働きが進んで行くことが容易くなる。言換へれば、同じ事を繰返して居ると次第に其の事が容易く行はれることになる。それは何が爲であるかといふことは十分に説明することは出來ないけれども、先づ一般に考へて居るところでは、或る一つの變化が或る神經系統の内を移つて行く場合に、それに對する抵抗が減じて來るのである。一度其の道を通つて或る變化が移つて行くと、その道に於ける障碍が取除かれ抵抗が減ずるといふ風に考へられて居るのである。さうすれば、一度より二度、二度より三度と繰返される度毎に容易く行はれるとになつて行く、變化が流れて進んで行く場合でも、それを喰止める場合でも同樣である。例へば何か仕事をして、初めてやる時には困難であるけれども、二度目には容易く行はれる、三度目にはもつと容易く行はれる、之は變化が流れて進む時の狀態である。それに反して、此の事はしてはいけないと、それを止めて實行しない場合、例へば酒を飲めば害があると考へて飲みたい時に我慢をして飲まないことがある、さうすれば二回目に飲みたいことがあつても一度それを堪へて居つたことがあると二度目には容易く喰止めることが出來る。之は何れの場合に於ても出て來ることである。そこで吾々は斯ういふことが言へる。吾々は精神的働きである

場合に於ても、それに關係して居るところの身體の組織といふものが變化を受けて居る、其の變化は後迄殘つて居つて、後の吾々の活動に對して影響を與へるものであるといふことが解かる。此等も身體と精神と如何に關係して居るかといふ其の問題に觸れて居るわけであつて、教育上から見ると極めて大切な問題であると思ふ。卽ち吾々の活動は、如何なる場合に於ても身體精神兩方面から見なければならぬといふこと、同じ事を繰返せば次第に容易くなるといふこと、此の事實は教育の全體に對して基礎を成して居ると言うて宜からうと思ふ。教育なるものは、此の精神物理的有機體といふものが、斯くの如き性質を有つて居ることを利用して其の仕事をやつて居るのであつて、若し之がなければ教育といふものは行はれないと思ふのである。

偖て、次には斯ういふ事を考へなければならぬ。前に述べた如き場合に、吾々の意識は如何に變化して行くか、此の意識なるものは、其の活動が行はれること

の困難であればあるほど、それに對する意識が高まつて來る。非常に骨を折つてそれをやるときには、それに對する注意が非常に昂つて明瞭に意識される。段々容易く行はれるやうになつて、それに氣を附けることが少くなると、それに對する意識が微弱になつて來る。それは子供の歩き初めの時を考へて見るとよく解ると思ふ。子供が漸く物に掴つて立上つて一足二足運ぶ時の努力は非常なものであつて、子供の注意はそれに對して非常に緊張して居る、ところがそれが次第に慣れて來ると注意が減つて來る。大人が道を歩く時はどうなるかと云へば、今日は之から何處へ行くべき筈であつた、或は彼の人に會ふべき約束をしてあると思へば、彼處に行くまでには歩かなければならぬ、歩く前に立たなければならぬと考へる者はない。彼處に行く日であると思ふと、椅子に掛けて居る者が知らないうちに立つて行く。さういふやうに無意識に行はれるやうになる。門を出る時の最初の一歩位は覺えて居るか知らぬが、左右々々を十分に意識して踏附けて居る者

は分列式をやつて居る兵隊だけであつて、普通の者はそんなことを考へて居るものはない。斯くの如く慣れると意識が微弱になつて來る。併しながら、又吾々は特別に注意をすることも出來る。卽ち一度は微弱なる意識を以て、殆ど反射的又自動的に行ふことが出來るやうになつて居る仕事も、特別に又注意をしてやることも出來る。吾々の呼吸等は最も良い例であらうと思ふ。吾々のして居る呼吸は自分の意志を以てすることが出來る、長い呼吸、短い呼吸、深い呼吸、淺い呼吸を自由にすることが出來るが、途中で話をして居る時には、呼吸をして居るかどうか殆ど知らないでやつて居る。けれども學校の子供が呼吸運動をやる時には、意識的に統制してやつて居る。斯くの如く、吾々は馴れて來ると無意識的にやることが出來るが、又それを統制的にやることも出來るやうに、非常に都合好くなつて居る。之を譬を以て說明すると、國の行政組織の方に於て、きまりきつた些細な事柄は下級官廳に委任して行ふことになつて居る、併しながら何か面倒な問

題に遭遇すると下級官廳は上級官廳に伺を出すことが出來ることになつて居る。上級官廳は下級官廳に指令を出すことも出來る。それできまりきつた仕事をする時には上級の方は知らないで濟んで居る、面倒な事があつて考へなければならぬ時には上級から指揮を仰いで處置することが出來るやうになつて居る。丁度人間の働きが斯くの如く出來て居るといふことは、これはやはり此の生理とか、解剖とか、組織といふ方面からもそれに都合の好いやうな仕組に出來て居るものと考へなければならぬと思ふのである。

吾々の精神の働きがどういふ風にして行はれて居るかといふことは解らないが、普通吾々の知つて居るところでは、吾々の意識的活動の行はれる時には大腦が働かなければならぬといふことに考へられて居る。ところが大腦以下の澤山の大小の神經節があつて、それが或る程度までは、それ〳〵獨立した働きを爲して居る。彼の心理學上、或は生理學上反射運動、自動運動の如きものは意識の統制を俟た

ないで行はれて居る。卽ち大腦の干渉を俟たないで、或るもつと下級の神經節に於てそれをやつて居るのであるといふ風に、吾々は考へて居るのであるが、その場合にやはりそれを統制することが出來る。自分は其の事を說明するには常に次のやうな例を取る。眼の前に何か光つたものが突然現はれるときには眼を塞ぐことが自然でこれは何人にも具つて居る反射運動である。ところが薄暗い部屋の中で寫眞を撮る時にマグネシヤを燃すと、相當激しい音がして相當激しい白い光が出る。普通の狀態であればマグネシヤを燃した時には眼を閉ぢるのが自然であるが、マグネシヤで撮つた寫眞を見ると撮つて居る人の眼は大抵開いてゐる。これは何故かと云へば、急に火を燃せば眼を刺戟するが、寫眞を撮るといふことは知つて居るから此の場合は眼を塞ぐべからずと意識して反射運動を起さないやうに統制して居るわけである。斯くの如く、吾々の活動は都合好く出來て居る。これを考へて見ると、身體と精神の間に微妙な關係があつて、切離して考へることが

出來ないものであることが解る。それだけに又敎育上から見て身體といふものが大切であるといふことにもなつて來るのである。

第六節　體驗の擴充及び統一

前に外から內に働きが及び、內から外に及んで來ると述べたが、この外といふ意味は身體の外といふ場合もあるが、さうでなく吾々の判斷、行動の主體といふものから見た內外と云うた方が考へが正しい、光が外から入つて來て眼に映るといふことは身體外から來て居るが、若し身體內から變化が起つてそれが意識に觸れると、それは內であるけれども、意識の方から見るとやはり外から內に入つたものと見てよからうと思ふ。その點から考へて見ると、身體と精神の間に微妙な關係があるといふことが解ると思ふ。吾々が記憶して居るといふこともやはり一度爲したところの體驗が、吾々の腦神經系統に、何等かの部分に於て何等かの變

化を貽して居るものと考へなければ説明の出來ないのは事實である。時に吾々にはどういふところからそれが起つて來たか解らなくて、何となく自身に或る考がふと浮んで來るといふこともある。それは始終吾々の生活の裡にさういふことがあるが、さういふ場合にどうしてそれが起つて來たのであるかと云へば、過去の體驗の既に意識の外に去つたものが唯だ一の生理的のものとして何所かに保存せられて居つて、それが力を得て現はれて來たものであるといふ風に考へられる。突然何も縁もない事を思出すやうなことは、殊に彼の催眠術の場合に多く起つて來る事で、催眠狀態に在る時に何かの命令を與へて置く、例へば明日の何時頃になれば斯ういふことを必ず實行せよと命じて置いて催眠狀態を解くと、本人は催眠中に與へられたことを判然知つてゐないが、其の時刻になるとふと實行するやうなことが起つて來る。それ等は好適例であると思ふ。さういふ與へられたところの命令が、吾々の意識の内にはないが何處かに保存されて居つたに違ひない。其

の保存されて居つたといふことは、吾々の身體の中に其の説明を求めなければならぬと思ふ。それと能く似て居るのは、子供の時に一向持つてゐなかつたやうな考が、或る年齢に達して始めて現はれて來ることが少からずある。吾々の本能と稱するものゝ如きは、大部分かういふ風にして現はれて來る、中で最も顯著なのは性慾などである。性慾は子供の時から有つて居つたのではなく、又外部から刺戟を與へられたのでもなくして、或る年齢に達すると自然に發生して來ることがある。それに對しては種々の説明が試みられて居るやうである。殊に近頃は内分泌等から説明するやうになつて來たが、確にそれ等は身體の上に起る生理的變化が原となつて、自然に現はれて來たものであるといふことが云はれるわけである。それで益々身體と精神との間に密接の關係があるといふことが云はれることになる。

偖て、また元に戻つて、吾々は受けるといふ仕事と與へるといふ働きの間に思

慮といふものがあつて、どちらかに自分の態度を決するといふことになつて居るのであるが、その結果がだん〳〵積み重つて來ると、次第に容易に行はれるやうになつて、それを行らないことにすれば行らないといふことが容易く行はれることになつて、吾々の體驗が重なれば重なるほど吾々の精神活動の内に一定の方針が定まつて來ることになる。それが心理學の方で云ふ習慣といふことである。ところが、普通は習慣といふことは意志活動の方面に現はれることを指して云つて居るのであるが、これは意志活動と知識的活動に通じて行はれる或る一の大なる原則に基いて居るものであると斯う云はなければならぬ。繰返すことに依つて抵抗が減じて、自づから一定の方向を取ることが意志活動の上にも現はれて來るが、知識活動の上にも現はれて來る。同じ事を繰返し、また學んで居ると、記憶が確實になつて直ぐにそれを思出すことが出來るやうになるといふことも、同じ原則の上に立つて居るものであると考へられるのである。さうすれば、吾々の體驗と

いふことは、種々の體驗が行はれる間に自ら統一せられて、其の人としては或る一つの定まつた道筋を通つて活動するやうになるといふことはそれから起つて來る。卽ち吾々の體驗といふものは、吾々の精神物理體として有つて居る特別の性質が基礎となつて自づから統一せられるといふことが考へられる。それで、教育の仕事は何をして居るのであるかと云へば、吾々の體驗の内容を擴充するといふことが一の教育の仕事である。而して擴充せられた體驗を統一するといふことも亦教育の仕事の一であるといふことが考へられるのである。

第七節　理性と感情

さういふ風にして種々の體驗が行はれて、段々それが統一せられて全體の活動が或る一の主義に依つて統制せられると、其處に確に動かないところの人格が形造られるのである。そこで教育の仕事は、吾々の體驗を擴充し、又それを統一す

ることであるとも言ひ得られる、又同時に統一的の人格を形造るのが教育であるとも言ひ得られるのである。所が統一をする爲には思慮といふものが大切な働きをして居る。同じものに對して同じやうに吾々が反應するといふことでなければ統一は出來ない。一の根本原理を立てゝ置いて、それに依つて總てのものを捌いて行くといふことが統一の上から大切な事である。その思慮の内に於て根本になつて居る所の大切な働きは何であるかと云へば判斷であると思ふのである。その判斷の働きは極めて大切なものであつて、その判斷が統一的に行はれるといふことでなければ、統一的の人格といふものは成立つて來ない。その判斷といふことは普通は知識的の活動に用ゐる語であつて、白い物を白い、赤い物を赤いと云ふことは一の判斷であるが、併ながら其の根本の性質から云へば、爲すべきこと、爲すべからざることを區別することも判斷である。それを區別して爲すべき事を爲し、爲すべからざる事を爲さないといふのは卽ち意志の働きであるが、その意志

の働きといふものがやはり判斷の一の形式であると自分は考へてゐる。それで此處に言ふ判斷は、黑を黑とし白を白と爲すとの外に、善を爲し惡を爲さないといふまでも此の中に包含されてゐるのである。それは決して無理ではないと思ふ。そこで判斷といふと吾々の感情といふものとの關係を見る必要があると思ふ。此の普通の判斷の最も純粹の形、卽ち純粹に理論的に判斷をする場合が最も典型的のものであると考へられてゐる。黑を黑とし、白を白とする場合はこれといふ判斷をする、卽ち一致を示す、これに反して甲は乙にあらず、乙は甲にあらずといふことは不一致といふことである。一致不一致といふことが基になつて起るのが吾々の論理的の考方である。一致不一致の意識といふことは或は議論があるかも知らぬが、やはり之は感情の一種であると思ふ。愉快不愉快等と同じく、一致と不一致といふ兩つの極があつて、その二を繫いで居る線の上に働いて居る一種の感情で、快不快と同じやうなものであると思ふ。これは少し面倒な問題である

か知らぬが、心理學上に於てヴントは感情の三方向說を執つてゐる。快と不快の方向に働く感情、又緊張と弛緩といふ方向に働いてゐる感情、興奮と鎭靜といふ方向に働いてゐる感情とがあると云つてゐる。ところが段々近頃は感情の方向はヴントの云ふが如く三方面に限られたものでないといふ考が起つてゐる。自分は、それは尤もな考へ方であると考へてゐる。自分は一致不一致の意識も感情の一の方向であらうと思ふ。特に一致不一致の上に働いてゐる場合には、吾々は論理的に正しい判斷を下すことが出來るのであるが、これは一の感情であるがために、他の感情に依つて影響されることが多い。殊に吾々に取つては、快と不快といふ感情に依つて此の一致不一致といふことを正しく見ることが出來ないで、誤つた判斷を下すことが割合に多いのである。憎むべからざる人を憎み、憎むべきものを愛したりするやうなことが起つて來る。斯かる場合には吾々は感情に依つて理性が妨げられて居ると云ふのであるが、實は感情と感情との間に斯ういふ關係が

あるので、一致不一致といふことも一の感情であるとすると、やはり感情相互の間の問題であらうと思ふ。そこで常に吾々が此の一致不一致といふことを嚴重に摑へて、それに依つて判斷する場合には、吾々の判斷は正しく行くが、快不快といふことがそれに影響すると、往々にして誤つた判斷が起つて來るのである。それから又身體と精神の關係に於て吾々の注意しなければならぬことがある。吾々の感情と云うても非常に複雜なものであつて、例へば苦味丁幾を舌の上にのせたときの不快感のやうなものもあるが、是は心理學で云つてゐる單純感情である。もつと複雜な或る一の事柄に對して起る感情、例へば愛憎といふやうなことになると大分性質が複雜になつて來る。それで性質から云うても複雜の度合から云うても種々の階級のものがあるが、茲に一つ注意しなければならぬことがある。それは人々の平素有つて居る所の氣分、全體に快活であるとか、全體に沈鬱であるとか云ふ氣分といふものが、吾々が物を考へる上に餘程關係を有つて居ることで

ある。全體の氣分が平穩快活である時には、考が滑かに行つて、割合に間違つた判斷を下さない、それが又嬉しくなるとそれが爲に誤つて來るが、大體に於て快活であつて滑かな時が最も健全な狀態である。ところが不愉快な氣分を有つて居ると、周圍のものが皆不愉快になつて、不愉快であるべきでないものが不愉快になつて來る。或は頭痛がして居る時とか、腹が痛い時は、人から話されると面倒で否定の方に傾いて來るといふ風で、始終吾々の判斷は此の氣分に依つて動かされる。その氣分、心理學者は之を一般感情と普通云うて居るが、此の一般感情は何から起るかと云へば、身體各部の生理的機能が完全に行はれて居るか不完全に行はれて居るかによつて差が生じて來るのであつて、身體各部に起る變化がずつと集つて來て、それが明瞭に何處の部分が都合好く行つて、何處の部分が都合好く行つてゐないといふ差別なく、全體が綜合された兆候として、全身が健康なときは快感を感ずることになつて、一般感情は快活になつて來る。若し何處かに故

障があると其の爲めに一般感情は沈鬱になつて來るのである。生理的機能が間斷なく行はれて居る以上、それが都合好く行つて居るか否かに依つて生じて來るところの一般感情は、吾々は一瞬間と雖もこれを脱却することは出來ないのである。故に吾々の人格が統一される時には、此の一般感情が重要なる役目をなし、一般感情の快活の人であると、その人格全體が快活に組立てられて來るし、さうでなく沈鬱の場合に於ては、その人の全體の活動が沈鬱に形造られて來るのである。人々の有つて居る哲學は、その人の胃の腑にあるといふことを云うて居る。これは何を意味するかと云へば、胃の健全である人は、その人の全體の氣分が快活になつて居るから、健全な胃を有つて居る人の世界觀は樂天主義に傾いて來、胃の健全でない人の有つて居る世界觀は悲觀主義に傾いて來るといふことを意味して居るのである。斯の如く吾々の生理的機能は吾々の人格全體を造上げる上に大切な役目を有つて居る。それだけ又吾々は教育の上から見て、此の身體といふ

ものを大切に考へなければならぬといふことにもなつて來るのである。

要するに、吾々は體驗を擴充して其の內容を豐富にする事、それを統一して人格を成立せしめる事、此の二つを大なる敎育の事業として見るのである。子供でも大人でも敎育を受けるものは各體驗をやつて居るのであつて、その擴充といふことも、その與へられたものを子供自身が取入れるのでなければ、子供の精神に立入つて物を與へることは出來ない。擴充でも、統一でも、それをする者は敎育を受ける者それ自身でなければならぬ。それは人が子供に對して榮養物を與へ、藥品を與へるときに、與へるといふことは他からするけれども、それを吸收して消化するのは子供自身の働きでなければならぬと同樣である。故に敎育は體驗を擴充し統一するといふことであるけれども、力そのものは受ける者の內に籠つて居るものであるといふことを見なければならぬ。さうすれば敎育は卽ち子供が成長發達するといふ力を豫想して、それに適當なる條件を備へて之を助けるといふこ

とである。それが卽ち敎育の仕事である。

第八節　環境の整理と示唆

體驗の擴充、統一それ自身は子供自らするのであるが、これを行はせるに都合の好いやうに被敎育者を置くといふことが敎育である。その方法を二つに別けることが出來ると思ふ。その一は環境の整理で、他の一は示唆である。此の示唆はサゼッションで普通暗示と譯して居るが、示唆と譯した方が宜いと思ふ。環境の整理といふことは、子供の周圍に在つて子供に影響を與へるものを整理して、有害なるものを遠ざけ、必要なるものを周圍に置いて、善良なる影響を受けるやうにすることである。子供に物を敎へるといふことは、何れかと云へば示唆といふことに屬するのである。子供に訓戒を與へる、敎訓示を與へる、或は知識を與へるといふ時には、敎育者から被敎育者に或物を注込むのであるから示唆の方にな

る。子供が惡友と遊ばないやうにするとか、或は遊んで居る間に惡い事を聞いたり見たりしないやうに注意するといふことは環境の整理である。此の環境なる語の中には自然界と人間社會と兩方を含んで居るのである。自然界は天地、山河草木等から起る所の影響である、それも支那人が昔云うて居つたやうに靈山大川の下に自ら偉人を生ずるいふやうな漠然たる語で云うては科學的でないが、その地方の風土なり氣候なり、その地方に在る動植物の如きものの影響を受けることである。殊にその中で大切なのは氣候とか溫度とか氣壓等の如きものである。その中でも殊に吾々に取つて密接の關係を有つて居るのは溫度と濕氣である。此の二つが吾々の敎育に對しては非常に大きな影響を與へるものであつて、それ等もやはり考に入れなければならぬ。次に社會的環境の中には、その住んで居る近所の人々の生活狀態に依つて非常に影響がある。尙狹くしては一軒の內に住んで居る兩親とか、兄弟の者から受ける影響もその中に含んで居るのである。此の環境の

整理が必要であるといふことは昔から云ふことであつて、支那に孟母三遷の敎といふことがあるが、孟母三遷の敎といふことには社會的環境の整理といふことが含まれて居る。社會的の影響に對して、注意して惡い影響を受けないやうにすることである。昔から此事は人々は注意して居つたけれども、不思議にも此の敎育學の上では餘り其の問題に深く入つてゐなかつたのであつて、子供は周圍のものから影響を受ける、併ながら其の影響と敎育者の與へる影響が相對して居つて、或る時には敎育者の與へる影響が周圍から受ける所の自然の影響に依つて助けられることもあり、或る場合は妨げられることがある。之を名けて隱れたる共同敎育者といふやうなことをヘルバルト派の敎育學者に云はれて居つて、敎育者が之をコントロールすることが出來ないものといふ樣に考へてゐた。所が近頃は更に敎育者の側から進んで、その管理することの出來ないと云うたものを管理して整頓させやうとして居るのである。その方面に種々の新しい敎育上の仕事が現はれ

て來たのであるが、その一二を擧げて見ると、ストラーセンペダゴギーク卽ち街路教育學といふことが云はれる。それは子供が街路で見るものは如何なる影響を與へるものであるかといふやうなことが一の問題である。商品の飾り棚中に列んで居る商品は子供に對して非常に影響を與へるものである。或る場合に於ては虛榮心を增長させることにもなり、嫉妬心を增長させるやうなことにもなり、或る場合には性生活、男女の關係に就ても刺戟を與へるやうなことが往々にしてある。虛榮心、嫉妬心のやうなものが喚起されて來ると、相當の教育を受けた者が萬引するやうな現象となつて現はれて來るのであるが、子供に對してもさういふ影響を與へるとであらうと思ふ。それに對しても教育上から見て一種の制限を加へるといふことも考へて居るのである。さういふことも街路教育の問題である。又是は亞米利加等の問題であるが、子供が外で遊んで居ると同じやうな年輩の子供と一緒になる。一緒に遊んで居る內に仲間の影響を受ける、それは善惡共に影響を

受けるのである。停車場、或は船着場附近で遊んで居る子供の內に惡い影響がある。今日の不良少年、不良少女の如きものが出來るのは、東京で云へば淺草活動寫眞館を中心としてさういふ問題が起りつゝある。それも今日では、組織的に、學術的に、其の現象を取扱つて豫防するやうに考へつゝある。斯かる方面にも教育學の一の枝が分れて行かうとして居るのである。さうなれば昔の教育學者が隱れたる共同教育者として、自分の管轄の外に置いて居つたものを、自分の管理の中に入れて整頓して行かなければならぬといふことになつてくる。とにかく環境の整理といふことと、示唆といふことと、此の二つが教育の主なる手段である。それを受けて利用するところの者は被教育者それ自身であるが、最初被教育者が十分に發達しない間には、此の二つのものがどういふ風に働くかと云へば、唯だ機械的に外部から刺戟を與へて、子供に或る影響を與へる程度に止まつて、子供は自分がどう考へてそれに就て態度を決することが出來ぬから、機械的に外部か

ら刺戟を與へて、成るべく健全に發達するやうにする外仕方がないのである。所が子供が斯くして導かれて行く間に、どういふ風にそれがなつて行くかといふと、子供自身の内に精神の働方の方向が定つて來て、自分といふ考が成立つて來ると、今度は自分自身が主となつて外部の物を利用して、自ら向上發展しなければならぬといふ覺悟を定めて來る。故に教育は機械的に外部から種々の刺戟を與へるとに始まるが、漸次自分を統制し管理することになつて來る。斯の如き場合に於ては意識的の統制といふことが意味を有つて來るのである。此の環境の整理の場合に於ても、示唆の場合に於ても、やはり意識的の統制といふことが働いて居るのである。唯其處には意識的の統制が自發的に行はれるか他動的に行はれるかの差である。吾々の生活を見ると、最初は盲目的に行動して居ると云うても宜い。例へば子供が赤い物を見て直ぐ手を出すやうな場合には無意識的と云ふことは出來まいが、十分の意識的の統制が行はれてゐない。又或る原因に刺戟されて、例へ

ば子供が乳を呑むといふことは、腹が減ると、腹の減つて居るといふ一種の狀態が刺戟となつて乳が呑みたいといふ感が起つて來るのである。その場合にはそれに對するところの意識の活動は極めて微弱であるが、斯ういふ時の最初は意識が明瞭でなくて盲目的に活動して居るが、段々習慣が形造られると、また意識が微弱になつて來る、其の途中に挾つて居る所が意識的の活動である。意識的の活動の行はれるところに吾々の思慮が存在するのであるから、吾々の生活は第一次の無意識的狀態があり、既に體驗を積んでそれが習慣になつた時に第二次の無意識的狀態が出來る、其の途中に意識的統制が含まれて居る、其の意識的統制を行ふものは思慮である。

そこで斯ういふことが考へられる。生物と無生物とを比べて見て何れが偉いかと云へば、誰でも無生物よりも生物の方が偉いと考へるが、その生物は何處が偉いかと云へば、少くとも意識といふものを有つて居るといふことを考へて居る。

誰も犬や猫になつて見た者はないから、犬や猫が意識を有つて居るかどうかは疑はしいと哲學者は云ふが、吾々は常識的に何等かの意識は有つて居ると思ふ。その意識的に生活して居るといふとは動物の無生物よりも尊い所であると考へて居る。所が孔子のやうに段々修業が積んで來ると、餘り思慮を用ゐないで生活して居つても道に外れたとをしないと云はれて居る。さういふ狀態になると習慣になつて居るために、それに對する注意が減じて來て、無意識的に雲が浮き水が流れる如く、すら〳〵と事を運んで居つたに違ひないと思ふ。そこで無意識狀態の二を比べて見ると第一次の無意識は盲目的のもので、第二次の無意識は意識的を經過して無意識になつたもの、即ち習練の結果であるから尊いのである。

それで吾々は吾々といふものを如何にして育て上げて行くかと云へば、教育が働く所は、此の意識的統制を通じて第一次無意識的狀態から第二次無意識的狀態に移る其間の關係を適當ならしむるといふとである。此間の思慮といふものは極

めて大切なるものである。此の思慮といふのは正しき感情に依つて動いて、正しく論理的に活動して居ると、其の人達は理性の優れた人であるとは云れて居るが、人間以外の動物の生活は餘り綿密な思慮に依つて導かれて居るものでないことは明瞭である。彼等を支配して居るものは本能であつて、其本能に依つて馬は馬、牛は牛の生活を爲して居るものである。人間も無論幾つかの本能を有つて居るが、併し本能のみに依つて支配されてゐないで、種々の場合に就いて綿密なる思慮をして吾々の爲すべき所を決定するやうになつて居る。即ち本能に依つて導かれて居る間に又幾らかの機械的の活動をして居ると云はなければならぬ。綿密なる思慮に依つて動いて行くことになると精神的に活動して居る、或は理性的に活動して居ると云はなければならぬ。そこが人間の貴い所である。故に近頃一の傾向として本能に重きを置くことが流行して、教育上に於てもさういふ考があるが、これは即ち支那人の謂ふ直情徑行といふ言葉に當るのであつて、其時々々自分の感

じたことを直ぐに行ふといふことになる。直情徑行は禽獸に近いのであつて吾々人間の爲すべきことではない。吾々は複雜なる思慮すべき力を備へて居るのであるから、綿密なる思慮に依つて吾々の生活を指導して行くのでなければならぬ。併し餘り思慮が立入り過ぎると又厄介になつて來る。前に述べた子供が初め歩く時に一足々々に苦心をするが、遂には不知不識の間に道を歩くことが出來る、一度意識的の統制を經て整頓されると後は段々省略されて行つて宜しいのである。餘り總ての事を考へ過ぎて一々初から研究して掛かることになると事がなかなか運ばない。神經衰弱になつて居る人等はくだらない事を考へて決斷が始終動搖して何時までも結果が附かない、其等は病的である。能く考へて既に決斷したはことそれに依つて事を運ぶやうにして行かなければならぬ。吾々は子供の時に歩方を練習するばかりではない、兵隊になると更に歩行を統制すべく歩調を取つて歩いて居るが、長途の行軍には道歩を取つて歩く、歩調を取つて歩いて居ると一里

も歩けば疲れる。それならば平素の歩調の練習は無駄になるかと云へばさうではない、初めは不規則な歩方をして居るが、練兵場で平素歩調を取る訓練をされて居ると道足の間にも不知不識の間に一定の歩調を取つて歩くのである。故に意識的統制を一度經て來るとそれに慣れて餘り氣を使はないでやることが出來る、即ち吾々は練習を積むとエネルギーを使はないやうにすることが出來る。一度良いと決まつたならば餘り考へないでやつて行き、その剩つた所を以て外の考を行つて行くことが出來る所に教育上の問題が現はれて來るのである。其一は何かと云へば、新しい問題に遭遇した場合に十分に綿密に考へて、自分の執るべき態度を決定することである。斯かる場合には、自分の新しい問題として自分の爲すべき事に決定して新しい事を造出すのであるから、これは創造と云うて宜いと思ふ。此時には吾々の意識が綿密になつて來る。所で一度さういふ風に極まつたならば今度は餘り力を用ゐないで自由自在に行はれるやうに慣らして來なければならぬ

即ち同じ事を繰返すことに依つて容易くなり、同時に段々それに對する注意が減退して機械的に行へるやうになつて行かなければならぬ。その働を名づけて習熟と云つて居る。教育には此の二つの方面がある。それを學校の仕事に當嵌めて具體的に說明すればどういふことになるかといふと、初め字を習ふ時にどういふ風にしてやるかと云へば、例へば「ア」といふ字を學ばせるには之を書かせて見たり、讀ませて見たり、紛らはしい外の字と間違はぬやうにしなければならぬ、「マ」と「ア」とが違ひ易い、「フ」と「ナ」とどう違ふかといふことを聽いて見たり、種々の方法を執る。それが解つたならば、今度はそれが何處に在つても直ぐ讀めるやうにするには澤山の書物を讀ませることが必要である。算術を例にとると、最初に子供に對して三に三を乘じて九になるといふことを敎へるのに種々なことをする。掛合はせるといふことは何であるか、三の數を三つ數へることである。或は三と三と三を加合せることであるといふことを說明する。また○とか△を縱に三つ並

べ横に四つ並べて見、或は横に三つ縱に四つ並べて、掛合はせるといふことは、三つづゝ四つ並んで居るものの全體が幾つであるかといふことを說明するのである。之を一々數へることは手數であるから三に三を乘ずると九になる、三を四に乘ずると十二になる、これは三を三つ加へる、或は三を四つ合はせるのと同じであるといふことを最初能く呑込ませるやうにする。後には之を一々數へることは面倒であるから、三三ヶ九、三四ノ十二といふ九九を敎へて、必要な場合には之を何處にでも應用して迅速に出來るやうに練習をさせる。さうなるとそれを呑込ませるのではなくして、慣れさせて機械的に働くやうにさせるのに外ならぬのである。此の二つの働きが相俟つて敎育なるものが成立つのである。此の習熟することに依つて容易く物が行はれるやうになり、それが爲に餘力を生じて新しい問題を解決することが出來るのである。又新しい問題を解決するのに、習熟したもので解決することが出來るのである。そこで此の二つのものを同時に見なければ

ならぬといふことになるが、近頃教育に於て創造といふことが頻りに唱へられ、教育雜誌等にも多く表はれるのであるが、併し此の創造だけではいかない、習熟も同時に行はれなければならぬ。創造といふことだけ考へて居ると習熟といふことが忘れ勝ちになるから、能く此處は注意しなければならぬと思ふ。

此の教育の一方には、絶えず新しい問題に對して自分の態度を定めて行くことが必要である。而してそのうちには新しいものを造り出すといふことが含まれてゐるのであつて、これが卽ち創造であるが、それと同時に又習熟といふことが必要である。此の習熟とは、物に慣れて骨を折らないで機械的に行ひ得るやうになることを意味してゐるのであつて、讀書力が附くとか或は計算の力が附いて來るとかいふのは之に當るのである。斯うなつて來ると、又一方には新しい問題に對して十分の力を用ゐるために餘裕を生ずることにもなる。又新しい問題と雖も全然新しいものではない、これまで知つて居ることを應用して新しい問題を解決す

るといふことである。此の二重の意味に習熟といふことが働いて來る。これは教育上極めて大切なことであつて、創造といふことだけでは教育の全體を盡さないことになると思ふ。

それについて斯ういふ事を一例として引いて置かうと思ふ。近頃亞米利加に於て唱へられて漸次他の國にも入り日本でも頻りに之を唱道して居る人もあるが、プロゼクトメソッド、之を自分共の研究室では構案教授法といつてゐる。それはどういふことを意味して居るかと云へば、これまでの教授の方法では、既に出來上つて居るところのものを子供にその儘これはかういふものであるぞと云うて教へて、子供自身に餘り考へさせることをやつてゐない、それでは子供に力が附いて來ないといふ考から、子供自身が工夫して問題を解釋することを練習させるやうな教授法にしなければならぬといふのが原である。然らばこれを如何なる方法によつてやるかといへば、問題を出して置いて、それを調べるに必要な參考書と

か、材料とか、機械の如きものを用意して置いて、子供自身が機械を使ひ、參考書を讀み、材料を使つて自分で研究することになるのである、教師はそれに就いて斯ういふ參考書を讀むが良からう、斯ういふ風にしてやつたらよからうと勿論助言はするが、成るべく助言を少くして、成るべく子供自身の工夫によつて調査させ、その調査の結果は子供が書いて來て、教師に指名された子供が其處で發表する、それと異つた考を有つた子供があれば、自然それに對して質問をし、或は自分の意見を發表し、質問なり討論が行はれる、それに對して教師は眼立たないやうに適當の指導を與へつゝ、子供自身の間に或る正しい結論が造り出されるやうにうまく導いて行く一種の教授法である。それが一昨年あたりから非常に喧しい問題になつて、亞米利加の教育雜誌等に說いて居つたのである。それが直ちに日本にも輸入されて、日本でも此の方法を奬勵して居る人がある。此の新しき問題に遭遇して、それを自分の工夫で解釋するやうな練習を與へることは洵に結構

な事と自分共も考へる。併しそれならばそればかりで良いかどうかといふことは疑問である。亞米利加でも是に對する教育學者の定見は區々で、種々なる教科目、例へば國語或は算術、歷史、地理の如きものに何んでも應用し得られるかの如く考へて居る人もある。また或種の教科目に特別に此の方法を用ゐるに適して居つて、學科の種類によつてはこれによることが出來ないと考へてゐる人もあり、又一の教科目、例へば地理なら地理といふものが徹頭徹尾始から終まで此の方法によつて教へらるべきものであると考へてゐる人もあり、從來の如く普通の授業をやつて居つて、其間々々にそれを用ゐるのであるといふ風に考へてゐる人もあつて、之を奬勵してゐる人の間にも意見が一致しないが、其中には斯ういふやうな批評をしてゐる人もある。此の教授法はその子供自身が自分で工夫して知識を求めるといふことに普通解釋して居るけれども、寧ろ教室に於て教へられたことを實際に應用して、その知識をなほ一層確實にして、實際に應用する工夫を子供に

させるところに意味があるのであつて、全く子供の知らなかつたことを始めて教へる場合に此の方法を用ゐることは餘り適當でないといふ風に考へてゐる人もある。吾々は此の方法は學科の種類によつては極めて適當なものであらうと思ふのである。自分は此のプロゼクトメソッドといふことが亞米利加から流行し始めない頃に、何かさういふ工夫が必要であらうと感じて居つた。例へば地理の教授をする時に、吾々の學校生活をして居つた時代の經驗から云へば、種々な事を教室で教へられるけれども、後まで記憶に存してゐることは甚だ少いのである。また學校で教はつたことが餘り實際に役に立たないことが多い。地理の中殊に地誌、卽ち地勢であるとか、湖沼の事であるとか、公園の事であるとかを聽く、併し自分の行つたこともない、自分の見たこともない土地のことをいつても記憶には遺らぬ、それで地誌は大體に止めておいて實際の必要のあつた場合にこれを取調べることが出來るやうな力を作つておくことが必要ではないか、それがためには地

誌といふものを餘り詳細に行渡つてやることは止めて、自分で調べる時には見當の附く程度に止めておいて、或る特別なる一地方を採つて詳しく調べさせる、そこには種々な物を應用して、その地方の事を詳しく書いた書物なり、地圖なり、寫眞なり、繪葉書なりを持つて來て讀ませる。一方に汽車の時間表を持出して一週間位の豫定を以て旅行して、その地方で見るべき名所舊蹟、或はその地方に在る特產物なり、產物の製造場の如きものを見て歸つて來ると假定して、何の汽車に乘つて、第一日には何處に泊つて何と何とを見、第二日には何處々々に行つて何と何とを見るといふ旅行の日程を編輯させるやうな問題を出すと、子供は喜んでやるであらう、斯の如きやり方が全國に亙らないでも一地方に就いて自ら調査した經驗を子供に有たせると、他の地方に行く時にもそれ等の材料を以て日程を編むことができる。かうすれば地理の知識が活きて働くことになりはしまいかといふことを考へて居つたのである。斯の如き意味に於て利用すれば、かういふ教

授法は大に意味のあることであるが、各科の全體を斯の如き方法で教へることは非常に困難である。何故ならば、此の方法を用ゐることになれば非常に多くの時間を要するから、すべての題目に亙つて授業をすることはできないであらうと思ふ。故に普通の授業の間々に題目を與へて調査させることが寧ろ穩當ではあるまいかと考へてゐる。また學科の性質に依つては此の方法が應用の出來る場合もあり、出來ない場合もありはしないかと思つてゐる。それに就いて亞米利加人の間にも、唯だ機械的に習熟することを趣意とする教科目、例へば作文の場合に文法を誤らないやうにする練習であるとか、計算を迅速にする練習であるとか、或は讀方を誤らないやうに迅速にする練習の如き場合には、斯の如き教授法は不適當であるといつてゐる人がある。これは自分も至極同感であつて、それ等は機械的習熟といふことを必要とする教科目であるから、其處には應用することはできないであらうと思つてゐる。それで教科目の種類によつて制限があり、又それを用

ゐる機會にも自ら制限がある。創造といふことに對しては有効の方法であるが、教育は同時に習熟といふことを考へなければならぬと思ふ。

同時に自分は學校劇に就いても考へて居る。これは少し餘談であるが此の機會に附加へて述べておかうと思ふ。學校劇といふものが近來頻りに流行して處々でやつてゐる。併し日本で現在やつて居る所謂學校劇なるものは、西洋諸國でやつてゐる學校劇とは多少違ひはしないかといふことが第一の疑問である。西洋でやつてゐる學校劇は授業の助けとしてやつてゐるのである。故に國語の時間とか、或は歴史の時間の如き場合に、教室内で即席にやらせることが多い。それがために教室の片隅にある戸棚に鍼力製のサーベルとか、ボール紙で作つた鎧、甲等が容れてある。例へば讀本の一節を讀んで、先生がジョージは王樣になれとかネリーは女王になれとかジョンは大臣になれとかと、即席に命じてやらせる。さうして先生は教壇を降つてそれを見てゐる。子供は自分で飛んで行つて、戸棚から自

分の役割に相當した道具を持つて來て、仕度をして教壇の上でやつて見せる、それは五分か六分で、學校でやつた課業の印象を深くし、理解を深くするためにやつてゐるのである。さういふ風に平日やり慣れてゐるから、學術會、或は卒業式の餘興等の時にもやらないことはないが、主としてやつてゐるのは、平素教へてゐる學科と聯絡して、それを能く理解し印象を深くするためにやらせるのである。それを極端までもつて行つて居る處では、歴史を教へるのに初めから先生は何も教へないで、卽ちプロゼクトメソッドを持込み、唯だ題目だけ與へて、役割を決めて兒童に申渡す、子供は參考書を見て自分の與へられた役割の言はなければならぬ文句を自分で作つて暗記して來る。さうしていよ〳〵授業の當日になると子供が自分で作つた臺詞を使つて芝居をやつて見る。歴史の教授を徹頭徹尾斯の如き方法で教へて、先生が話をすることも書物を讀むことも全然やらない處もあるが、さうするとその準備のために非常に澤山の時間を要して、而も行渡つた授業

が出來ないであらうと思ふ。單に子供にやつて見させるといふだけでは、その時代の精神を捉へるとか、或は一の事件と他の事件との關係を能く會得させることはできないと思ふから、餘り極端にすべての教科を演劇化する方法には贊成し難いと思つてゐる。日本でやつてゐるのはそれとは多少趣が違つて居つて、日本では學校で教へて居る教科の內容と關係させてそれを助ける手段としてやるといふよりも、寧ろ最初から餘興本位になつてゐるやうである。學藝會でやつて見せるとか、父兄會でやつて見せることを主としてやつてゐるのであつて、平素の課業と獨立したものとなつてゐるやうであるが、それは他の國でやつてゐるのとは別であつて、坪內博士の如きは主として藝術的教育の上から兒童劇を見て居られるが、其は自から別問題として考へなければならぬ。

要するに吾々の問題としては、自分で構案させることも必要であるが、また習熟させることが必要である。それには機械的の練習が大切である。

第九節　習慣の構成及改造

偖てさういふ風に習熟した結果、吾々がたやすくこれを行ふことができるやうになつて、その場合に餘り思慮を要しないことになるが、吾々の體驗は自ら周圍の事情によつて限られてゐるから、吾々には絶えず新しい問題が提供されて來る。これまで慣れてゐる仕事の上で、かくあるべきものだといふことを一度決めて、其處に習慣が出來て居つても、全くそれと違つた問題に遭遇すると、その過去の習慣を改造して行かなければならぬ事が始終起つて來る。そこで斯ういふことが考へられる、ヘルバルト派の教育等では、教育の目的、殊に訓育の目的は善良なる習慣を作るにあるといつてゐる。如何にも尤もな事と思ふが、ジャンジャック・ルーソーの説の中にかういふことをいつてゐる、「何事も習慣とならざる習慣を作れ」と、これはひねくれた言ひかたで、何でも型に篏まつて決まつてしまはないやう

な人間になれといふことであつて、前の主張と相反して居るやうに見える。吾吾は之に對してどういふ風に考へるかといふと、善良なる習慣を作れといふことは正しい考へかたであるが、習慣は周圍の事情によつて限られて居るに拘はらず、世の中には始終新しいものが出て來るから、それに對して過去の因はれたやり方をすることは宜しくない、新しいものが出て來た時には、新しいものとして處置するやうに教訓されなければならぬと思ふ。ルーソーのいつてゐるのは其點に重きを置いてゐるので、然らば兩方とも眞理を含んだものと見なければならぬ。それで吾々は教育とは習慣を構成することであるといふことができる。一方に於て絶えず新しきものにぶつかつて、その習慣を改造して行くことであるといふことができる。習慣を改めるといふことは、一方に於て構成があつて、それは習熟の働きであり、一方に於ては絶えずそれを尙一般的に通用するやうに改造して行く、改造と構成と相並んで進んで行くといふことが教育の正しき途であらうと思ふ。

若し習慣が固定して了まつて改造される餘地がなかつたときには、卽ち頑冥固陋になるのである。若し一般に習慣が作られないで、絶えず動搖して居つたならば其人の人格は立つて來ない、常に動搖する所の不確な人間といふことになつて、習慣の構成と改造とは、兩方とも必要といふことになつて來る。

第十節　人格の同時及繼續的統一

前に自分は人格といふことを述べたが、人格の統一といふことは如何なる形で現はれて來るかといへば、これに二種ある。一は人格の統一は同時の統一であり、一は繼續的統一であるといふことが出來る。その同時統一とは、吾々が何か仕事をしてゐる時に二或は三の行動を考へ、或は行つたりしてゐることがある、その考へたり、行つたりしてゐることがいくら澤山あつても、共にこれは同一なる人格の活動でなければならぬ、否根本に於て一の主體が活動してゐるのでなければ

ならぬ、それが二に別れて居つては人格は統一されて居らぬ。それで繼續的統一といふのは、過去に於て考へ或は行つたことも、現在考へ或は行つて居ることも、將來に於て考へ或は行ふことも、皆同一なる我の働きであるといふことである。それが若し或時には異つた我の働きであるならば繼續的の統一がない。これが健全なる人間であるならば、此の二種類の統一は存在してゐるわけであるが、此の統一が時に障碍を受けて妙な現象の現はれて來ることがある。時に病的の現象として斯の如き統一の破られた狀態が現はれることがある、何處の何といふ人であつたかよく記憶しないが、亞米利加の事であつたと思ふ。或る一人の女がヒステリーになつて半身不隨であつた、ところで其女を立たせて丁度身體の中心に隔壁を置いて實驗をして見ると右半身と左半身と各獨立した行動をした、卽ち右の方から話掛け、左の方からは鉛筆を持たせて名を尋ねると右と左と別々な名を書いたといふ例がある。これは人格の分裂といふ現象である。また或る時には甲の人

間の積りで働き、或る時は乙の人間の積りで働いて居つたりすることがある。これは人格の轉換といふ現象であるが、これは人格の統一の上に現はれて來る障碍であるが、さういふ事でなくして人格的に纏つてゐるのが普通である。前の人格の分裂、或は人格の轉換の時には自我が別れてゐるが、統一の時には自我といふ觀念である。同時のときには種々の働きをして居つても、共に同一なる自我の活動であるといふことを知つてゐることが必要である。過去の我も、現在の我も、將來の我も同一の自我であるといふ風になつて、謂はゞ繼續的の統一で、人格の統一の中心點を成すものは自我の觀念であるといふことがわかる。

第十一節　自我觀念——自我觀念の發達

此の自我の觀念といふことは非常に面倒な關係を含んでゐるのである。解つたやうで實は解らない。一體我といふのは如何なる範圍のものを我と謂ふのであるか、我といふのは最初から我といふ考が備つてゐるものであるか、その邊が實にむづかしい事であると思ふ。先づ生れたばかりの子供が我といふ觀念を有つてゐるかといふと、明かに有つてゐないといふことが出來る。子供は自分で種々の働きをする、親の乳を呑んだり、手足を動かしたり、眼を開いたりしてゐるが、これは自分の力でかういふ事をしてゐるのであるといふ自覺は有つてゐない。子供の小さい時には自分の身體が自分の物であるといふことすら知つてゐない。故に子供のやつて居るのを見ると、日本の習慣としては小さい子供に長い衣服を着せてあつて脚が隱れてゐるが、どうかして自分の足が見えると、玩具か何かを發見したやうに、珍しさうに見てゐる。自分の足ではあるが、それを知らないから自分の手を伸ばして足を捉へ、自分の足が引込むと猫か犬でも探すやうに、自分の足を探さうとして大騒ぎをしてゐることがある。その足は自分の足であるといふことが解つてゐない、隨て自分といふものが判然解つてゐない、次第に體驗を積

んで來るうちに、自分の考によつて動くものと、自分の考によつて動かないものとの差別が附くやうになり、自分の考と離れて勝手次第に動くものは自分以外のものといふ風に區別して來る。併しそれは機械的に限られて居る。ところが吾々の自我といふものはなか〳〵複雜なものであつて、それだけに限られてゐない。吾々は隣家と自家とを相並べて、宅はかうである、隣はかうであるといふ場合には自分の家を以て他の家と相對して考へる、自分の國と外國とを相對して話す場合には自分の國を我と考へて他の國と並べて見て居る。斯の如く我といふものゝ範圍は廣くも狹くもなつて來る。その標準の取り方によつて變つて來るのである。それ故に此の我に對する非我は、或る定つた內容の上に於て或る定まつた境界を有つて居るものではなくして、非我と自我といふものは方向を示すものであるといふ風に見たいと思ふのである。方向を示すといふことは如何なる意味であるかといへば、東京は北か南かと聞いたのでは問題にならない、何かを標準として北

か南かといはなければならぬ。例へば仙臺から見て東であるか南であるかといへば、南であるといへるが、標準がなければいはれない、それは方角の標準であるが、それと同じく何所かに標準を取らなければならぬ、その標準の取方によつて自分の家族が我となることもあり、自分の國が我となることもある、其時々々の標準によつて變つて來るものであるから、一定の內容を有つて初めから動かない境界を有つてゐるものでないといふことがいへると思ふのである。

して見ると、自我なるものは非常に解りにくいものであつて、始終その範圍は變つて來る。併し吾々の日常の經驗に於ては常に自ら標準となるものが定つて來るから、日常生活に於て互に話をする場合には故障が起つて來ない。醫者の家に患者が來て、「私はどうも胃が惡くて困ります」といふ時には、肉體的自我を指していつてゐるのであるから、その人の胃の事だと考へることができる。大概の場合常識の上で何を標準として居るかを判斷するから問題は起らないが、實際は解

りにくい問題である。斯くの如く方向の上に於て自我か非我かといふ區別があるのであつて、內容の定まつたものがないといふことになると、自我を擴めて行くと何處までも擴まつて全世界をその中に包含することができる。又これを追窮すれば自我なるものは何處までも退却するもので、非常に面白い性質を有するものである。

第十二節　自我は體驗の集積

然らば自我なるものは一體何であるかといへば、卽ち前に述べた體驗の集積である、而かも統一せられたる體驗の集積である。これが人格の內容を形造つてゐるが、此の體驗の集積といふことは如何なることか。吾々は物か何かを受取り、見たり聞いたりする、それに對して何かの働きをする、その中間に吾々の思慮が含まれて居る、その思慮には吾々の感情も含まれて居る、その反應の態度の上に

於て意志の活動も含まれて居るといふのである。さういふやうな結果が積り積つて自分といふものを形造つてゐるものであるとすると、吾々の此の行動は何によつて定められて來るかといふと、例へばその人が爲した所の體驗の結果が自分の態度を決めるために確かに働いて居る。例へば或る特別の料理が非常にうまかつたといふことを覺えてゐて、それが食べたいものだと考へると、その馳走が出た時には喜んで食べる、その御馳走が非常にうまかつたそれを食べたいといふ慾望は自分の內に在つて動かして居る、最初は外に在つたものであるが、內に這入つて動かしてゐるものである。さういふ風で段々取入れられると內の物になつて內から動かして居る。親とか國とかいふものが外にあると考へるから外にあるが、自分が親を愛し、兄弟を愛し、妻子を愛する、その愛の力は自分の心の內に入つて居つて、自分の心の內に宿つて居る親、妻子といふものを自分の內から働かせて居るといふことに見ることができる。天地萬物我と同一體といふことは哲學

的見地、宗教的見地から說かれてゐることであるが、さういふ場合には、或る一つの源から分れて天地萬物が出たといふことになると、同一なる本體の現はれたものであるといふ風に見るのが普通である。或は之を觀念論の立脚地から見て、物が存在して居るといふことは卽ちそれ等を知つて居るといふことである。知らない物に對してはそれが有るか無いかといふことを言ふ權利を吾々は有つてゐない。存在といふことは吾々がそれを認めて居るといふことである。一切の有つて居る物は自分の觀念であるといふことで、天地萬物共同一體といふのである。その立脚地と自分の今言つて居る事とはよく似てゐるのであるが、又少し違がつてゐる。前に述べた自分の親とか、兄弟とか、或は妻子とかいふものは自分の內のものであつて、自分といふものを內から動かして居るものであるといふことをいふためには、えらい哲學說の如きものを借りて來るまでもなくして、全く普通の經驗的の立場からも言へると思ふ。卽ち自分が或る一人の人を愛して居ると、その

人といふ考は自分の內に在つて、その人に對する愛も自分のもので、その人を愛するといふ愛情は自分の內から動かして、その人に對して親切を盡すといふ働きを爲して居る。その働きは自分のものであるといふことをいふのである。前に體驗の事を述べる際に、此の體驗は單に知識的のものでなくして感情、意志をも含んだものであると斷つておいたが、觀念論から云ふと萬物が我に備つて居るといふことは、寫眞とか鏡に映つて居る影の如く、唯だ冷やかな物の姿が映つて居るが如く解釋され易いのであるが、さうではなくして、自分のいふ意味は體驗の內容が自我を形造つて居つて實際に力あるものであつて、それには喜びも、悲みも、怒りも、愛も憎も皆その內に含まれて居るものである。最も具體的の意味に於て之をいふことができるのである。

第十三節　自我と世界

前に自我といふものは方向であると述べたが、それと照合せてどうなるかといふと、人格が完全に統一せられて居る場合に於ては、すべての體驗の內容は能く整理せられて、一の原理によつて示されてゐることが必要である。さうなると自分の體驗の全體が常に主體となつて吾々の行動をさせることにならなければならぬ。さうすると自分といふものは吾々の知つてゐる限りに於ての此の世界といふものと同じもので、換言すれば人々は自分を中心として自分の周圍の自分の世界を造出して居るといつても宜し、或は世界の中心が自分に存在して居るといつても宜いが、さういふ風に始終吾々が全體として行動してゐる場合に人格の統一が確かに立つてゐるのであるが、その中に於て又特別の問題に對して判斷をする場合には特別の標準が立つて來るのである。何時も自我の全體が意識せられてゐるわけではなく、前に述べた如く吾々には意識的の活動もあるが、同時に無意識的の活動がある、自分全體が自我を形作つて居るわけであるけれども、具體的の問

題に遭遇して判斷をする時には、その時々の必要に應じて特別にその中心點が現はれて來る。それであるから此處を指で押して之が地球の中心點であるともいへる。地球を一周して來ると再び此處に戻つて來るから中心と云ふことが出來る。唯此處を中心とすればすべての物の關係を此處を中心として解釋すれば宜しいのである、何處が中心でなければならぬといふ限りはない、唯だ全體をそれに相當するやうに說明すればよい。

第十四節　中心點の選擇

そこで吾々は具體的の問題を說く場合に、それ〴〵の特別なる中心點を擇んで判斷をする。その場合には必ずしも自我の內容を形造つて居る過去の體驗の全體が意識に現はれて來る譯ではない、現はれて來ないけれども潛在的には總てが存在して居るものであるといふことを考へて居ればよい。

乃木將軍は忠君愛國の精神に富んで居られた方であるが、例へば御飯を食べて居る時大層甘い、もう一杯食べやうか止めやうかといふ時に、何時も忠君愛國といふことから判斷して居るとは考へられぬ。もう一杯食べるとお腹が損ずるか知らぬ、軍人として身體を損じて一日でも休むと不忠になる、故に飯を控へるといふ議論は出來るが、此際は身體を損ずるかどうかといふことを中心として判斷すれば宜いのである。理窟を附けるならば何を中心としてでも說明が出來る。平素から全體が纏りが附くやうになつて居れば、或る一の中心點を立てゝ直ちに判斷を下すことが出來る。吾々には意識的の働もあり無意識的の働もあり、複雜なものであつて、何時も體驗の全體が意識的に現はれて、それが標準になつては居ないけれども、又意識的に之を統制することも出來る、唯吾々の全體が整理せられて圓滿に統一せられて居ればそれでよい。さうなつて居れば假令或る一の問題に遭遇して、或る一の自分の考から判斷を下しても、全體的に其處に統一があれば

間違つた判斷は下ださないことになる。けれども實際に於てはそれが困難なことであつて、時々特殊の問題に遭遇すると、其人としては甚だ不似合のことをすることがある、それが卽ち思案の外といふことである。或る中心點を設けて判斷する時に、特殊の自我は判斷を下す時の自分の立場を意味することになる。その立場が動いて來ると、時としては全體的に統一されて居る所の自我の全體が其處に現はれて來ないで、特別の部分的のものが現はれて來て突飛なことをやることも起つて來るのであるから、さういふことは避けなければならぬ。若し十分修業の積んで居る者であるならば、覺めて居る間は勿論、夢の中に於ても不都合な考が浮んで來ないといふことになつて來べき筈である。さういふ風になつて來るのは敎育の最も好く行はれた場合であるけれども、なか〳〵さういふことは吾々には出來ない、吾々のやつて居るのは大きな理想の一部分を漸く實現して居るに過ぎないのである。

前に自我と非我のことについて述べたが、それに對して少しく補つておきたいと思ふ。我々が何時にても統一せられたる人格として行動せねばならないことは大切であるが、その場合に過去の體驗が悉く再び現はれ、總てが明瞭に意識せられるといふことは到底出來得ないことである。故に唯平素の修養の結果として、全體その人の行ふことが或る一つの主義、或る一つの原則から出て居つて纏りがついてゐるやうに、その人に訓練を與へておくことが出來るのである。そこで或る一つの問題に遭遇したときに如何なる位置に自分をおき、而して如何に判斷を下すべきかが自から定つて來るのである。故に其時には前述の如く種々のことを體驗して來れば、その內容には自分の知つてゐる限りに於てのあらゆるものが包含せられてゐるわけである。其の內に於て自分が何かの行動をするといふ場合には、自分の造り出したその世界の中に又特別に活動の主體としての我といふものが立つて來るわけであるから、その活動をうける客體として何物かが現はれて來

なければならない。それが卽ち非我である。斯く觀れば、我の立場の決め方によりて種々區分が出來るから、自我と非我の間には內容の上から一つの明かな差別が立つてゐる譯でなく、自分の立場の選擇によりて廣くも、狹くもなるのである。換言すれば、我と非我とは一つの直線の兩極をなしてゐる方向であつて、或る決つた點から、自我であり、これは非我であると、斯の如く區別が立つものである。如何なる位置に自分を立てゝ考へても、潛在的には總ての體驗が人格として行動しなければならぬ、斯ういふ意味である。

第十五節　個人主義、國家主義と國際主義

次はその立場の上から見て、敎育上に屢々現はれて來る所の個人主義、國家主義、國際主義を吾々は如何に觀るべきかを考へて見たいと思ふ。敎育上に於て敎育の目的は個人々々の完成であるといふ考は可なり有力である。それで人格完成

を目的とすれば、教育は各人の生長發達を助ける働きであるといふことになる。ところが其の環境に對して如何なる關係を有して居るかに重きをおくと、教育の目的はその周圍卽ち環境に順應することであるといふ考も自然起つて來る。自分の周圍のものに對して適當に吾々が行動するやうに其の人間を育てることが教育の目的である、斯樣な考も起つて來る。そこで人格の完成、卽ち其方からいふと教育は生長であるといふことである。それから他のものに對して適當な關係を保たせることを主として考へれば、順應といふことになつて來る。斯樣に解釋すればその二つは一致することになる。何故なればその環境と言ひ、周圍の事物といふものは、吾々の體驗の內容として自分の內に取り入れられてゐるから、其の間に完全なる秩序が立ち、而して統一がなければ生長といふことも行はれない、生長するといふことは卽ちその體驗によりて取入れられた種々の內容、卽ち自分の家とか、或は自分の國、兄弟、親といふものに對する關係が適當になつてゐると

いふことを意味する、それが出來てゐなければ其の個人も完成してゐるのでない、斯ういふ風に考へられるのである。さすれば生長と順應とは結局一致することになる。

さて斯の如くして見ると、今日まで頻りに議論の種子になつて居つた所の教育上の個人主義といふものと、教育上の社會主義、社會主義といへば經濟問題や政治問題に使はれてゐる所謂社會主義と混同される虞がある故に私は別の言葉を用ひたいと思ふが、Collectivismus 卽ち集團主義というてよからうと思ふ。社會全體に於て共同生活をするのに都合の好いやうな人間を育てあげることを目的とする教育主義である。さういふものとの爭ひは最早必要がないことになる。そこで集團にも種々の集團があり得る譯であるが、其の中に於て最も重要なる位置を占めてゐるものは國家である。此の國家に對して教育が如何なる働きを爲すか、これが大なる問題になつて來るのである。教育上に於て國家主義といふものは屢々

唱へられて居る、その立場からいへば、教育は國家の繁榮を目的とするものである、私のいふが如き立場から觀るならば、國家の繁榮が充分に正しき意味に解釋せられてゐるならば、やはり個人々々の完成といふことと矛盾しない譯である。さすれば最早其處に衝突はなくなつて個人主義と國家主義は決して矛盾するものでないことが言ひ得られるのである。今度は國以外に尙ほ廣き世界といふものがあるが、それに對して如何に考へらるべきかが問題である。それについては、世界大戰後の思想の傾向について述べる必要があると思ふ。

國家主義と世界主義とは相對して屢々これが論爭の題目となつて居つたのであるが、それに對して世界大戰後どういふ傾向が現はれて居るかといふことを簡單に述べて見よう。今回の世界大戰はその範圍の廣いとからいうても、またその戰爭に直接關係して居つた人間の數からいうても、從來の歷史に類のない大なる戰爭であつた。而してその戰爭の結果は非常に大であつて、いづれの國も皆その後

始末に困つて居る譯である。戰爭といふものは勝つても、負けても結局何處かに悲哀を伴ふものである。今回の戰爭の結果についても、戰敗國たる獨逸、墺太利は勿論、戰勝國たる英吉利、佛蘭西の如きも種々の困難を惹起して居る。中立國と雖もやはり困つて居るのであつて、中立國の中でも歐羅巴の小國は戰爭當時より相當の苦勞をして居つた、何故ならば嚴正中立を守つて居る爲にはやはり國境を守備しなければならぬ、それに對しては澤山の人間を使ひ又金をかけて居つたのである、故に戰爭には參加しなかつたが、殆ど戰爭に參加したほど金を使つてゐる。而して戰爭後の經濟界が斯の如く不振になつて來ると、同じくその渦中に投ぜられて非常に苦んでゐる有樣である。斯の如き種々の事實から考へて見るならば、戰爭は實に惡いものであるといふことを人類全體が敎へられたことになる。戰爭は決して喜ばしいものでないことは、昔から決つたことであるけれども、戰爭の惡いことをこれほどに痛切に、深酷に敎訓せられたことは未だ曾てなかつた

らうと思ふ。斯の如き有樣になつて來れば、戰爭が將來再び起らないやうにしたいものであるといふ希望は、何れの國にも起つて來ねばならないわけである。其點については吾々日本人はそれほど深く考へさせられて居ない。何故ならば日本は戰爭に參加してはゐたが極く一少部分の人が直接に之に關係して居つたのであつて、日清日露の大戰役に比べて今回は實に輕い感じがしてゐる。戰爭そのものは大であつたが、日本人のそれに關係した程度からいふならば極く淺かつたのである、それ故に再び戰爭の起らないやうにしたいといふ感じも、歐羅巴の國々の人よりは餘程淺いと考へられる。その積りで此の問題に對して考へて見なければならぬが、此の戰爭が再び起らないやうにしようといふことから、政治上に於ても經濟上に於ても種々の試みが現はれて來た。それを概括して國際主義と稱することが出來よう。その國際主義が教育上に於て如何に現れて來たかといふと、玆に一二の例を擧げて見ると、戰爭の終り近き頃から後に教育のやり方を變へて、

而して人類全體が仲善くして行くやうに教育して行かなければならぬといふことが、言論の上に現はれて來たとは勿論である。具體的に現はれたものをいふと、戰爭の半ば過ぎた頃、聯合國相互の間に於て教育事情視察委員といふものを交換的に派遣して、つまり甲の國の委員が乙の國に行つて教育事情を視察し、乙の國の委員は甲の國の教育事情を視察して來るといふことを始めた。最も人の注意を惹いたのは佛蘭西から亞米利加に渡つた教育視察委員であつた、その委員は一方には亞米利加人に對して佛蘭西の教育事情を話して聞かせ、一方には亞米利加の教育事情を視察して皆其の報告書を出してゐる、戰爭後佛蘭西の教育改造に對しては、其の報告が餘程有力なる刺戟となつて居る。斯の如く教育視察委員を交換したといふことは、一つは外交上の意味も含まれて居つたであらう、卽ち聯合國相互の關係を圓滑にし、親密にし、而して戰爭中互に協力しようといふ政策上の意味も勿論含まれて居つたことであらうが、併しその結果は決してそれに止つて

はゐない、眞面目に教育上に於ても新しい考がそれに促されて起つて來たのである。

また誰しも知つて居る如く、亞米利加の軍隊が佛蘭西に渡つて戰爭をした、そのうち休戰になつたのであつたが、佛蘭西では專門學校、大學等を開放して亞米利加人の入學を勸めたのである。亞米利加の軍隊は俄に造り出されたものであつて、その中の下士或は少尉、中尉といふやうな人は大部分大學の學生であつた、それ等の人は喜んで入學した。佛蘭西ではそれ等の人に對して多くは特別講義を開き、佛蘭西事情を說いて聞かせて居つた。英語の達者な先生は英語で其の講義をして居つたが、さうでない人は英語の通譯付で講義をしたのである。又亞米利加の學生でも佛蘭西語の充分出來て居る人はさういふ講義に出たばかりでなく、佛蘭西學生と一緒になつて普通の講義にも出、研究室にも出入して居つたのである。その結果が非常に良好であつたといふことを佛蘭西の側に於ても、亞米利加

の側に於ても頻りに言うてゐる。それによつて佛蘭西人と亞米利加人とが互に能く理解し合ひ、亞米利加の軍隊の中には佛蘭西語が頻りに這入り込み、亞米利加の學生は佛蘭西語に慣れて來、同時に佛蘭西の學生は英語に慣れて來たといふことを言うて居る。斯の如くに相互の國民が互に理解することに於て將來長く親密なる關係が保持されると言うて居る。學生相互の間に親しい友達が出來たのみならず、親類が出來たといふことを書いて居る雜誌もある、それは佛蘭西の大學の女學生と亞米利加の將校であり學生であつた人との間に幾組かの結婚が成立つたことを言ふのである。それ等は我々日本人の考から見るならば、軍人が戰地へ行つて、向ふで結婚して凱旋の時に妻君を連れて來るなどといふことは、或は軍紀の頽廢といふことを考へられるが、これはさういふ問題についての考へかたが違つてゐるのであるから、その積りで見なければならぬ。さういふことがあつてから後、これは平素に於ても學生を交換して互に相互の國情を理解させることがよ

からうといふ議論が起つて來たのである。これが一つである。

次に小學校、中學校の學科課程の上に種々新しい要求が現はれて來た。それは何處の國でも從來地理歴史の教材は多く本國の地理歴史に限つて居つて、外國のことは僅かしか教へなかつたのであるが、將來は所謂國際主義から見てもつと多く外國のことを教へなければならない、而して地理歴史の授業を通じて外國を理解させ、之に依つて圓滿なる關係を保たせやうといふやうなことを唱へた人も多くある。中には亞米利加人であつたが斯の如きことを言うて居る、亞米利加の中學校邊りでは東洋のことを從來教へてゐなかつたが、それではいけない將來は伊藤博文と李鴻章の名前を知らない亞米利加人は、亞米利加人として完全なる教育を受けたものといふことが出來ないとまで言うて居る人がある。斯樣なことが國際主義の具體的に現はれたものである。ところが、今日の國際主義といふは第十八世紀の終頃に唱へられて居つた世界主義とは餘程異なるのである。今日の國際

主義者は所謂世界主義者ではないのである。何處が違つて居るかといへば、嘗て唱へられた世界主義、或は博愛主義は國の差別を認めない、國境を認めないで世界全體を一つの人類の共同生活體として見るといふやうに漠然と考へて居つた。それを唱へた人は宗教家であり哲學者であつた。ところが今日の國際主義は政治家、實業家が寧ろ主になつて居る有樣で、國境を認めないで、世界を打つて一丸とするやうなことは考へてゐない、國は國として立てゝ、相互の間は成るべく衝突のないやう、圓滿にやつて行きたいといふ希望なのである。故に國際主義論者は殆ど一樣に、吾々の唱へて居る國際主義は決して非國家主義に非ずと言うてゐる。國家主義と衝突するものでないと言うてゐるが、事實また其の通りである。そこで今日の國際主義と、漠然とした人道主義或は博愛主義とは違ふ。平和主義人道主義といふ語を時に使つて居ることもあるが、內容は大分違ふのである。即ち國家主義を含んで居る所の國際主義で、その根本の動機は何處から來て居るか

といへば、戰爭を成るべく避けたいといふことから來て居る。斯の如き考が戰爭の終り頃から始まつて、後暫くの間盛んに唱へられたが、其の表面に現れて居つた國と國との間の關係を圓滿にするといふ思想は、數年後になつて大なる變化を來した、これは吾々の餘程注意すべき點であらうと思ふ。元來戰爭は惡いものである、故に戰爭は將來起らないことにしたい、斯ういふのであるが、若し戰爭が絕對に止めにならないものならば、自分の國だけは强くなつて居なければならないといふ考になつて來る。戰爭終つて平和會議となつたが、國際聯盟も餘り有効でないことが段々分つて來、平和會議に於て決定されたことも其後一向實行されて來ない、國際主義は唱へて居るけれども戰爭はどうも無くなりさうにもない、斯樣な考が起つて來るから、少くも自分の國だけは强くなつて居りたいといふ考が强くなつて來たのである。最近には表面國際主義が立つて居るけれども、その中に含まれて居る國家主義の方が寧ろ有力になりつゝある傾向がある。それは如

何なる所に現はれてゐるかといへば、先づ獨逸についていへば、獨逸では從來中等學校に於ては外國語が主になつて居つたのであるが、革命が起り新憲法が決定した時には、從來外國語を中心とした中等學校の外に純粹なる獨逸國粹主義の中學校を起すことが決められて居るのである、それは高等獨逸學校といふのである。これは下は小學校に連續し、上は大學に連續する學校である。其處では獨逸語獨逸文學と獨逸の歷史等を主として敎へ、外國語を入れても極く僅にして置き、其他の理科の方に屬する學科などに於ても、やはり全體に獨逸精神が漲つて居るやうに組織するので、さういふ考までであつて未だ具體的のやり方は決つてゐない。殊に外國語を入れるか、入れないかが非常に喧しい議論になつてゐて決定はしてゐないが、多分外國語は一つ位入ることになるだらうと思ふ。併し入るとしても一週間に三、四時間位で、後は獨逸語でやつて、獨逸主義で固めることになるらしいのである。さういふ學校が獨逸に起らうとしてゐるが、やはり之には獨逸國

粹主義を鼓吹し、國民の團結を固め、列國との競爭の上に於て有力なる位置を保つて行かうといふ考が入つてゐるものだと思ふ。是と非常に能く似て居るのは、獨逸と競爭の地位に立つて、今日に於ても頻りに軋轢し合つて居る佛蘭西である。佛蘭西でも獨逸が高等獨逸學校を起さうとしたと殆ど同じ精神から中學改造が企てられてゐる。それは先頃政府から發表した中學校改造案で、これは未だ決定はして居らぬが、今頻りに教育者が議論して居る最中である。それに依ると斯ういふことがある、佛蘭西の文化は羅甸文化である、佛蘭西の國粹は卽ち羅甸民族の精神である、其處で將來の中等學校に於ては此の羅甸文化を中心にしたいといふ考である。從來の佛蘭西の中等學校を見ると、羅甸語、希臘語などをやる部と、現代の獨逸語、英語をやる部と別れて、それが又後に文科的の學科を多くやるものと、理科的の學科をやるものと別れて行くやうに出來て居つたのであるが、今回の案に依れば、やはり別れて行くことは別れても共通は羅甸語をやらせる、羅

甸語をやらない學部は中學校には設けない、同時に一方に理科を加へ、此の二つを主なる學科として中學校の課程を組立てようといふやうな案である。併しそれに對しても可なり有力なる反對論が現はれて居つて、結局何處に歸着するかは疑問であるが、政府當局者が左樣なる考を起した原因は、獨逸との對抗上からであらう。此の二つは歐羅巴大陸に於て起つた新しい運動である。亞米利加の方に於ては幾分形は變つて居るが、やはり同樣亞米利加主義が起つて居る。その運動は米化運動とでもいふたら宜いかと思ふ。亞米利加は、移民が集つて國を爲して居る處であつて、處によりては今日でも亞米利加の國語たる英語の通用しない地方がある。それ〳〵の移民が集團を爲して居る處に於ては、その母國の國語を互に使つて居る。日本人で桑港邊りに居るのも其の狀態である。私は十何年か桑港に居る友人の奥さんに先年會つたが、其人の話に亞米利加へ行つたならば英語を使はなければならぬと思つて、態々會話の稽古に二年ばかり苦勞をしたのであつた

が、亞米利加に渡つてからはとんと英語を使ふ機會がないといふことを聞いた。さういふ處が澤山あると見える。故に國民精神の一致が甚だ難しいことになつて居る。茲に於て米化運動が起つたのであるが、戰後殊にそれが激しくなり、今日は熱心に亞米利加の土地の上に住んで居る人間は悉く亞米利加的精神を持つやうにしなければならぬと喧しく唱へて居るのである。それが具體的に現はれた案としては、先年來亞米利加の議會に於て問題となつた一の教育奬勵法案である、それは前にはスミスタウナー法案というてゐたが、此頃はスターリングタウナー法案と言うてゐる。その法案は從來亞米利加の各州が經營して居つた教育に對し、今回合衆國政府の中に文部省を設けたい、從來は唯教育局があつて、其處で教育上の調査をやつて居つただけで教育行政の機關はなかつた、故に文部省を置き、それに澤山の豫算を與へ、それを適當に各州に分配し、各州に於ける教育を奬勵しようといふ案である。其のスターリングタウナー法案も、この米化運動が根本

の趣意になつて居るやうに吾々には察せられる。第一に全國を統一的に一つの教育機關を設けたいといふことが、既に米化運動の現はれであると思ふが、それのみならず、各州に於て此の法案によつて奬勵金を受ける學校は、英語を以て教授する學校でなければならぬ、これが第一の條件として擧げられて居る。この影響を受けて桑港、布哇に於ける日本人の學校が大いに苦んで居る譯である。日本人は亞米利加人の建てゝ居る小學校へ通つて義務教育を受け、其外に朝早く一時間ばかり、それから學校が終つて後一時間ばかり日本語及び日本歴史を日本語學校に於て教へられて居たのであるが、亞米利加人は迫つて此の日本語學校を殆ど解散しなければならないやうにしてゐる、是はつまり米化運動の結果である。今日は斯の如き狀態になつて居る。茲に於て吾々は之を如何に批判すればよいかといふに、一國の問題は一國の立場から解釋することである、一地方の問題は一地方、世界の問題は世界の立場より之を解釋することである。それには又一方に於て實

際吾々の生活はどれだけ共通的になり、どれだけ組織的になつて行つて居るかを見なければならぬ。今日では國家は系統的に纏つて居る所の共同生活體として一番大きいものであるから、其處に重きを置いて考へることが大切であると思ふ。其處に於て國家主義を棄てることは出來ないが、將來は段々と共同生活の範圍が擴つて行き、國と國との間に於て共同の事業が行はれて來ることは當然考へられることであるから、成るべく國と國との間の關係も亦圓滿に保たれなければならぬことも當然のことである。それ故極めて姑息な考のやうであるが、今日の國際主義に依つて、國は國として立ち、而して其間の關係を成るべく圓滿にして行かうといふ考が、實行上から見て最も穩當なものと考へられるのである。所謂國家主義を包含して居る國際主義が、實際上の主義として最も穩健なものであらうと、私は考へるのである。

第二章　教育と文化

第一節　選擇及び價値

第二章に於ては教育と文化といふ題の下に今一層具體的に教育の仕事を說明しようと思ふ。

前に私は人間の働きに於て最も大切なものは何であるかと言へば、思慮であるといふことを述べた。思慮はそれならば如何なることをするのであるかといへば思慮の役目は選擇に歸着するのである。選擇は或る問題に對して右に向ふべきか左に向ふべきかを決定することである。故に思慮は結局選擇をすることが其の本務である、その選擇は甲と乙とどちらがよいかといふことで、その善惡を決める

ものは價値である、吾々は少なく價値を有つて居るものを捨てゝ、より多くの價値を有つて居るものを選擇するのである。其處で思慮は各々の體驗の中に含まれて居り、從つて各々其の體驗を爲す際には必ず其處に選擇が行はれて居り、其の選擇の中には價値の考が含まれて居るのである。さて此の個々の體驗に現はれて來る所の價値の考は又部分的のものである、或る場合には此方がよいといふことになるが、外の場合には此方より此方がよいといふことにならう。さやうに個々の場合に是よりも是が良いといふ部分的價値を標準として吾々の個々の體驗は成立つて居るのであるが、段々その體驗が重つて來るに從つて、その行動の間に自から一貫した主義が立つて來るといふことは前述の通りである。斯の如くなつて來れば、個々の部分的價値の判斷から導かれて來て更に廣い範圍に亙つて統一的價値の判斷が行はれて來ることを意味して居るのである。一方自分の體驗が統一せられて來ると價値の見方が段々高くなつて來る、その最も高い總てのものゝ判

斷の標準になるところのものが卽ち最高の價値を有つて居るものであると考へられる。斯の如くして吾々の生長が出來て來るのである。その最高の價値が所謂吾吾の善と稱するものであつて、それが生活の目的になつて來るわけである。而して段々個人々々が經驗を積んでやつて來ると、何時か其處に價値の系統が立つて來り、それが其人の行動を律する標準になつて來るわけであるが、吾々は其の場合に斯ういふことを考へて見なければならない。

第二節　敎育と文化

敎育に依つて人間を導いて行くのは一體如何なることを意味して居るのであらうかといふと、此の敎育は短縮せられたる進化過程であると言つてよからうと思ふ。個人々々の發達した狀態は人間が段々發展して來た道程を繰返すものであることは、敎育上に於ては一つの有力なる考になつて居る。卽ち發生學などで見る

と、人間が母親の胎内に宿つて居る時、唯一つの卵子から分列して分娩の時になるまでの經過を見ると、單細胞動物から人類になつたまでの生物進化の跡を追うて居る如きになつて居る、これは大體に於て認めて居る所である、それと同樣に子供が大人になつて來る間に經て來る種々の階段は、野蠻未開の人間が文明に進んで來る間に經て來た階段を繰返すものであるといふのが有力な一つの思想であつて、而してそれを基礎として學科課程を立て、教授法を考へたりすることも行はれて居るが、玆に一つ考へて見なければならないことは、一つの卵子が分列し、段々複雜になつて、而して人間の子供となつて來るまでには、單細胞動物から人間になるまでの進化の過程を繰返すと言ふのは唯大體に於てであつて、悉く其の間に現はれた一々の階段を經て來るわけではない、非常に其過程は短縮されて居るのである、短縮せられて居なければ迚も母親が受胎してから九ヶ月や十ヶ月で產れて來ることは出來ない、其間に短縮されて居るのであるから、教育もそれと

同じであつて、個人々々の發達なるものは未開人が文明になるまでの道程を繰返すというても、自然に進んで來ることを考へて居つたのでは間に合はない、それ故結局同じ所に歸着するものであるならば、出來るだけ其の道程を簡單にしなければならぬ。其處で吾々の自然に起つて來る所の體驗の上に於ては斯うすればよからうと試みにやると失敗に終る、第二回には他の方法を試みる、偶然にでも成功すればよいが、さういふやり方は道程が長くなるわけである、それを吾々はもつと手取り早く短い時間に子供を大人にして仕舞はなければならぬ。それには如何にするか個人々々が既に長い間の努力に依つて造り上げたものは社會全體の中に保存せられ、過去の人間の既にやり遂げたものは所謂精神的財產として社會に保存せられて居るのである。その社會が保存して居る精神的財產を名づけて吾々は之を文化と言ふのである。其處で古人が手當り次第に、たゞぶつかつて經驗したやり方をしないで、最初から計畫を立てゝ早く進んで行くやうにする、それが

卽ち教育である。そこで普通教育であるならば先づ十四五歳から十六歳位までの間に一人前の人間になるやうにしなければならぬ。それには既に出來上つて居る文化を見、その出來上つて居るものを受入れてどん〳〵進歩するやうにする、玆に於て教育は子供の生長發達を助けると一方から言ふのであるが、又一方から見れば過去に於て造り上げられた文化、卽ち精神的財産を子供につけて、子供を今日の文化生活の中に入らしめるといふことになるのである。それは前述の集團主義或は社會教育主義の主張する所である。それは吾々の立場から見ても決して矛盾しない考である。或は之を文化教育主義ともいふのであるが、その立場からいふと、教育は社會に保存せられて居る所の精神的財産を子供に傳へ、而してそれは子供の側から見れば今日の文化生活に入り込むことになり、一方から見れば斯樣に見ればよいと思ふ、文化の傳承といふことが教育の目的である、斯の如く考へられる。其所で過去の教育が如何に發達して來たかを見たいと思ふ。それを見れ

ば今日の教育は如何なるものであるべきかが自から分つて來ると思ふ。

第三節　教化の階級的發展

今日では教育上の機會均等といふことを言ふが、過去の教育はさうはなつて居ない。種々の社會階級が勢力を得て社會の表面に現はれて來る、夫に隨つて特殊の形を以て教育が行はれて來た。卽ち社會階級の發展と相伴つて教育が發展して來たことは歴史上明に認められるのである。それはもう少し具體的に之を說明しなければならぬと思ふ。一體此の教育を廣い意味に解釋すると、各々の家庭に於てやつて居る非組織的の教育も其の中に含まれて居るが、學校でやつて居る組織的の教育は餘程進んだ教育である。廣い意味で考へれば非組織的にやつて居る周圍の感化も教育の中に含まれて居るのであるが、狹く考へれば系統を立てゝ初めから一つの計畫を立てゝ行ふ組織的教育だけを指すことになる。玆には其の組織

的教育の方を捕へていふと、其の組織的教育が行はれる爲には生活の餘裕がなければならない、人間が唯生きて居ることのために全力を注がねばならぬ狀態にあつては、到底組織的教育は出來ないのである。そこで吾々は彼のマルクス一派の人が唱へて居る唯物史觀のやうに、總て人間生活の基礎になるものは物質的生活經濟的生活で、その總てから說明することが出來るといふ一種の觀方に對し、必ずしも左樣に考へてゐない。人間が進步して來るためには、やはり理想を描いてそれを追究することがあるのである。それは必ずしも物質的生活が產出するわけではないと思ふ。併しながら世の中が進んで來るためには、少くとも消極的條件として物質的生活の上にも餘裕がなければならぬと思ふ。その區別を明瞭にするために斯ういへばよいと思ふ。物質的生活が進めば精神的にも發達して來るといふことは必ずしも言へないが、精神的に發達するためにも物質的生活に餘裕がなければならぬといふことが言はれると思ふ。そこで物質的生活に餘裕の生じた所か

ら段々に組織的教育が發達したと考へられる。その最初のものは何であるかと言へば、それは印度、埃及また希臘の例を見ても、歐羅巴の中世の例を見ても、我國の古を見ても、皆僧族から起つて居るのである。僧族といふと吾々が使ひ慣れて居る文字から言へば佛教に關係されて居る人のみを言ふのであるが、玆には廣い意味であつて、神佛に事へ、人に道を說いて居る人を總て引つくるめて言ふのである。さういふ人達は組織的に教育を最初受けた、それは何故かといふと、その人達は神樣に事へて居るから人が只養つて呉れる、神佛に事へて居れば色々供物がある、誠に彼等には都合好く出來て居つた、何處の國を見ても神佛に事へ、人に道を說いて居るものは成るだけ無慾でなければならぬ、質素に生活をしなければならぬ、と能く言はれて居る。佛教でいふ如く佛法僧の三寶に喜捨といふことは無上の功德であると說かれて居る。而して自分達の教訓としては質素に生活しろ、無慾になれと言はれて居る。その人達が人に道を說く時には、お寺へ寄附

したり、坊さん達に寄與することは非常に功德になるぞと說いて居るから、人が皆持つて來て呉れ、それに依つて養はれて居つた。故に畑をしたり、或は家を建てたり、着物の材料を織つたりするやうなことはしないでよい、其の餘裕を利用して學問することが出來た、又學問をしなければ人に道を說く勤めは果されないことになる、そこで彼等の間に先づ組織的敎育が起つたのである。其人達の受けた敎育は、或は敎化というた方がその時分は適切であるかも知れぬ。それは如何になつて居つたかといふと、勿論宗敎中心でそれが第一である、併しながら宗敎ばかりでは成立つて行かない、種々他の學問が必要になつて來る、例へば祭りを行ふについては其日を決めなければならぬ、さすれば曆の必要もあれば曆を作るためには天體の觀測も必要である、自然天文學がついて來るわけである、又人に道を說くためには宗敎上の種々の敎を書物として取扱はなければならぬから文學も彼等の間に發達する、それのみならず種々問題を持つて來て尋ねればそれに對

して解釋を與へてやるだけの一般の學問が彼等に必要である、醫術もやはり僧侶の組織的敎化の一部分を爲して居つたものと思ふ、何故ならば昔世の中の開けない時分は病氣に罹つたものは先づ第一に神佛に御祈をする、坊さんなり神主が代つて祈禱をしてやる、御祈禱ばかりでなく同時に御水を飲ませたり、お呪禁をする、其處には自然と醫術の原になるものが現れて來るわけである、そこで醫學もやはり僧侶の組織的敎化の中に一部分として含まれて居る、中心は宗敎であるが種々の科學が含まれて居つたのである。一方には藝術も含まれて居る、神樣の御堂を建てるといふことからして建築の必要がある、像を造るといふことから彫刻繪畫の必要もあり、お祭りをやる時には音樂舞踏の必要がある、そこに藝術的の要素が含まれて居るのである。これは印度でも、埃及でも發見せられるのである。其の僧族についで組織的學問を受けたものは何であるかといふと政治、軍事に屬して居つた社會階級である。これは國に依つて種々に現れて居るために、或は貴

族と呼ばれ、或は武士と呼ばれ、或は士と呼ばれ、或は希臘の如く自由市民と呼ばれて居つたのである。此等の人は又社會に勢力を受けることになり、彼等も亦組織的教育を受けた其の組織的教育は如何がになつて居つたかといへば、彼等は政治に關係するから文道の修養が必要である、その道は何處から採つて來たかと言ふと、前の時代に僧侶階級がやつて居た種々の科學藝術或は宗教から自分の必要とする限りに於て色々な分子を集めて來て、而して文道として修めた、ところが戰爭に行くことになればそれだけでは足らない、坊さんのやつて居なかつた外のものを付け加へなければならぬ。それは何であるか、卽ち武道である。これは印度でいへば、僧族に相當するのはバラモン族であるが、其次はシャトリヤ種族である、それ等の人は學問をする時は、坊さんのやつて居つたことを自分の必要とする程度までやり、一方に於ては武藝をやつて居るのである。埃及でも希臘でも略々同樣であつて、希臘ではミュージックといふものが自由市民の學ぶべきもの

として必要なものであつたことになつて居る。今日ではミュージックといふ字は音樂といふ字に解釋するのであるが、希臘時代のミュージックは範圍の廣いものであつて、僧族のやつて居つた學問全體を言つて居る、それを自由市民がやつて居つた。ところがそれでは足らぬから、戰爭に行く時分にはこれは武道を修めたのである。我が國でも武士の教育を受けて居つた時分には、頻りに文武兼備といふことを申して居つた、此の文武兼備を以て教育の必要を現したのは、前述の如く貴族、武士、士、自由市民と種々あるが、政治及軍事を司つた所の教育の特色であるのである。之を概括していへば、畢竟彼等は政治的訓練を受けた。軍事は矢張り政治から導かれて來て居るものである。僧侶の教育に於ては宗教生活、科學的生活、藝術的生活が教育に觸れて居つたのであるが、政治的生活は貴族、武士、士、自由市民が組織的教育を受ける時分に始めて觸れて來たものである。ところが此の僧族と貴族、武士、士、自由市民はまだ吾々の生産經濟と云ふものには

觸れて居ない。何故ならば僧侶は人から供へられた物、寄附に依つて生活して居る、又貴族、武士、士、自由市民は自分の部下の奴隷とか農民を働かせてそれに養はれて居る人達であるから自ら生産事業に關係しない、從つて生産經濟には觸れて來ないのである。生産經濟に觸れて來るのは、其次の町人階級が組織的教育を受け始めた頃からである。武士階級の時分には文武兼備が教育の理想であつて、而して生産經濟に關係したとには成るべく携はらないことに努めて居つたのである。それは何故かいふと、彼等の社會的地位からいへば、それ等の人達が金を儲ける考を持つことは却つて有害であるから、それを避けて居つたのである。のみならず又社會的地位から見て、其時分の階級的社會組織から見ると、自分達より地位の低い者が生産事業をやつて居つたから、自然さういふことに携はらないことになつて居つたのである。然るにその次になつて町人が現れた。茲に言ふ町人は職をやつて居る人を言ふのである。それは歐羅巴の中世紀からそれ等の人が集

つて、彼方此方の町をつくり上げ、其處で共同に一つの自治體を造つて居つたものである。歐羅巴の都市は最初町人が集つて成つたのである。其處で初めから自治的に行政が行はれて居つたために所謂自由的な考が發生して來た。日本は外國貿易や何かのために起つた町も多少あるが、例へば泉州の堺などは支那貿易の爲に町人が集つて來て出來た町人町であるが、多く日本の都市は大名城下が原となつて居る。武士階級の御用聞といふ意味に於て町人が集り、而して城下町が出來た。故に其發達の狀態が歐羅巴とは餘程違ひ、從つて總てのやり方が違つてゐる。併しながら教育上からいへば、そこに共通の點がある。町人階級が段々と勢力を得て來、金が出來て來ると、自分達の子弟を教育するためには學校を設けたのである。その學校は最初は僧侶や武士が學んでゐる學校を眞似たものであつたが、それでは彼等には役に立たないから、町人を教育すべき町人風の學校を建てることになつて來た。我國に於てもそれは發見することが出來る、日本でも或る程度

までの商工業は餘程古くからあつたものであらう、けれども町人が社會の一つの勢力として頭を擡げ始めたのは凡そ足利時代の半ばからのことであると思ふ。彼等もやはり最初は寺へ通つて居り、寺は同時に學校を意味して居つたのである、此寺に次で寺子屋なるものが出來た、此寺と寺子屋の二つの言葉を比較すると、私は非常に面白い意味が其處にあると思ふ。何故かといふと、寺子は今日の學校兒童と言ふべきであらう、其下へ持つて行つて屋の字を付けたのは寺子の集る家である、此屋は米屋、酒屋、餅屋とかいふ場合に付けるのであるが、商人が自分の店舗を指すための屋の字が教育機關たる寺子屋に付けたといふことは、それだけ教育機關が民衆化し世俗化したことを意味して居ると思ふ。其の民衆化、世俗化したことと相伴つて教育の内容が餘程變つて來たことを發見する。先づ西洋の町人の建てた學校の整つて來た所を捕へて申すと、それより前のお寺の教育に於ては、文字を學ぶと言へば羅甸語本位であつた、町人はそれでは間に合はないか

ら自分達が平生使つて居る言葉を文字に現すことをしなければならぬ。丁度其頃互に口で話すだけに使つて居つた國語が段々整理せられ、稍々纏つた國語なるものが形造られつゝあつたのである。それが學校に入り、町人の學校では其國の現代の國語を教へることを始めたのである。それは餘程實用的になつた、日本の方でも略同樣であつて、日本のお寺で教へて居つたものゝ一部分には純粹の宗教的のものもあつて、お經なども教へて居つた處もあつたやうであるが、他のものに於ても漢文本位であつた。それが寺子屋が發達して來てからは餘程變つて來た。寺子屋に於て教つて居るものは往來物がその中心であつた、此の往來物といふのは模範書翰文集といふ如きものである、作文のお手本であり、習字手本であつて、同時に讀本であつた。それの一番古いもので現在に傳つて居るものは、平安朝に出た明衡往來と稱するものがある。是は藤原明衡が作つたので明衡と名前が付いて居る。是は貴族生活に屬することが多い。文體は殆ど漢文ではあるが、日本語

であるといふ證據に所々に「侍」といふ字が入つて居る位のもので、殆ど漢文と言つて宜い。武家時代になつて往來物は數々あるが、その代表的のものは何であるかといふと、彼の庭訓往來である。これは漢文が碎けて來て候文になつて居るが、まだ假名混りになつて居らぬ、引繰返つて讀むやうになつて居る。其の內容は如何かと言ふに武家生活に關係したものが集められて居る。一番初めに年賀狀が出て居るが、其中に一度弓の會を催したいから適宜の人を誘つて來て吳れと云ふことが書いてある、さう云ふやうに武家生活に關係したものが多い。所が德川時代になると非常に變つて來て假名混りになつて居る。所々「難有」「奉存候」「相不變」と引繰返つた所は漢文調が殘つて居るが、其他は假名混りの日本語になつて居る而して內容は町人生活に段々接近して居る。中にも彼の商賣往來は商業作文集と言つて宜いものである。それから番匠往來といふものがある、これは大工指物師などに入用なものを集めたお手本である。往來物の內容が餘程職業生活と觸れて

來て居ることは注意すべきことである、また算術も同樣であつて、歐羅巴でいふと、町人學校が發達し始めた頃から利息算の如き實用的、商賣向きの算術が發達致した。それが原になつて今日に於ても實用算のことを町人算術と言つて居る。日本に於ても寺子屋の發達して來る頃、支那から算盤が這入つて來た、かやうに町人階級が組織的になると、著しく敎育が實用主義に傾いて來た。これは卽ち町人階級なるものは生產經濟に携つて居るものであつて、彼等の敎育は又生產經濟に觸れなければならなかつたからである。然らば今日は如何になつて居るかと言ふと、此の町人階級が頭を擡げて來た時分は卽ち平民であつて、僧侶貴族に對して居つたのである。所が今日は新聞雜誌などによくあるやうに、何か新しい洋服でも着たり、ハイカラな帽子でも持つて居ればブルジョアになつたと人が言ふ、此ブルジョルアは平民階級であるが、今日では第二の貴族社會と云ふ意味に普通使つて居る。これは卽ち更に新しい社會階級が頭を擡げつゝあるから、それと對

して平民であつた町人が第二の貴族である如く見られることになつたので、その新しい階級は何であるかと言へば工業勞働者である、これが頭を擡げつゝある時代に、普通教育なる考が擴つて來て、終に結晶して義務教育制度となつたのである。故に工業勞働者もやはり普通教育を强制的に受けさせられることになれば、これまで種々社會教育を受けて居たものでは間に合はないものがあることは當然起つて來る。そこで種々新しい要求が教育の上に現れて來ることは自然と言はなければならぬ。故に今日に於ては小學校の學科課程に於て、手工であるとか、學校園の事業の如きものが加へられ、それが又一部の教育論者に非常に重要なものであると主張せられて居るのである。それ等の手工とか、學校園の事業とか云ふものが何故に必要であるかと云ふことを説明するために、教育學者は種々な理由を掲げて居るのである。或は之を心理學的に考へ、從來の教育は目と耳とを通じての教育であつたが、更に腕を通じこの教育が行はれなければならぬといふやう

なことをいふたり、或は今日の都會生活は自然に遠ざかつて居る、此の不自然な生活のために人生と自然界とが遠ざかつて居るものを更に結び付ける必要があつて、それは手工科であると言つたり、或は今日の發達した機械工業では、品物が如何にして造り上げられるかは工場の中に隱れて仕舞つて、一般俗人の眼には映じない、今日の都會の子供は反物にしても如何なる仕事に依つて造り上げられて來るかは分らないから手工科を教へ、自然界に存在して居る材料が人間の必要を充すべく、殊に如何なる道筋を經て形を變へて來たかと云ふことを知らさなければならぬ、それが手工科であるといふたり、或は又手工教室に於て共同の仕事をして居る間に人間社會の共同生活を理解することが出來るのであつて、これが國民教育の基礎であると云ふことをいふたり、種々な理由を立てゝ手工科を説明しまた之を切りに奬勵して居るのであるが、それ等の理由は相當に私は道理のあることであると思ふ。併しそれ程此の人間に取り必要なものであるならば、何故そ

れに心付いて、もつと早くから小學校の科目中に加へられなかつたか。それは其の必要にぶつかつて來るまでは心付かなかつたのであると言はなければならぬ。それならば誰がそれを發見して小學校の課程に加へたか。それは誰と云ふことは出來ないであらうが、工業勞働者が普通教育の制度の下に組織的教育を受けるに當つて、從來の教育に未だ缺けてゐて不足のある所を悟らしめたのであると言はなければならぬ。故に今日の教育上の新しい要求をするためには、斯の如き方面の社會生活、殊に經濟生活の上に起つた所の變動を背景として考察することが必要である。それで僧侶は僧侶、貴族は貴族、町人は町人、工業勞働者は工業勞働者と各々特色ある教育を致して居りそれ〳〵の型が出來てゐる。それを名付けて私は教化の類型と云ふ語を以てしてゐる。その教化の類型とは最初一つの社會階級が勢力を得て來た時に類型を造る、次に他の階級が勢力を得て來た時分に第二の類型を造るのであるが、第二の類型は第一の類型に於て缺けてゐるものを自分達

が造り出し、それに加へることになつてゐる。更に第三の類型の起つて來た時分には第一第二の類型の中に含まれてゐて第三の階級にも必要なものはやはり取り入れられ、それに缺けてゐて自分達に必要なものは又加へることになつてゐる。斯の如くせば種々なる教化類型が相次で現れ、其中に何れの社會階級にも必要であるものは亡びて了はないで、だん〳〵後のものに取り入れられ保存せられることになり、而して段々教化類型は融合して發達して行く、其の融合して行くことに依つて吾々教育の理想、教化の理想がだん〳〵圓熟に近付いて行くのであると考へて宜からうと思ふ。かくの如く種々の變化類型が出來て融合することになると、その必要とする所のものが段々多方面に亙つて、人間の生活として全體に觸れることになつて來る、宗教、科學、藝術、政治と云ふものはあるが、更に其上に道德生活がある、此の道德的教訓は僧侶階級の教育から最近の工業勞働者の教育に至るまで何時でも通じて行はれてゐるものである。そこで吾々の教育と云ふもの

は人間としての生活の有らゆる方面に觸れて、我々の必要のものが取り入れられて圓熟した教育の理想が今日出來てゐるといふやうに考へられる。斯くなることは人間として已むを得ない。人生の圓滿なる發展と言うても、その必要に迫られて來るまでは如何なるものが必要かは分らない。寒くなるまでは綿入の必要を忘れてゐる、と云ふことは人間として已むを得ないことで、又暑くなるまでは單物の必要を忘れてゐる。而して一夏、一冬過ぎると夏冬の仕度が一通り整ふことになるのである。それ〳〵社會的人間生活の全體が明瞭になつて、それに對する準備が教育の中に取り入れられて今日の教育の內容を形造つてゐるのである。故に今日になれば社會を階級的に見ることは段々なくなつて、平等に之を見ることになつて來たから、今日に於ては共通なる文化を背景として、其上に均等なる機會を與へられて、各人が平等に教育を受けて發展して行くといふ時代になつてゐるのである。

第四節　普通教育と專門教育

斯の如くなると玆に又考へるべき問題が起つて來るが、すべてが受けるべき教育は如何なるものであるかといへば、種々の社會階級が造り出した類型の中に含まれて居る內容の中から、度々の變遷に何時も選擇されて取入れられて行つたものが積み重つて、今日の普通教育の內容をなして居るのである。然らば特殊のものでその普通教育の中には取り入れられなかつた部分は如何になつて居るかと言へば、それは亡びてしまつたのでなくて、今日でも專門教育の中に之を存して居るのである。それで今日に於ても佛教大學だの、耶蘇の神學校なるものがあつて、宗教本位の僧侶教育の跡が殘つて居る。僧侶階級の教育に於て一つの要素となつて居つた科學は、科學其ものゝ發展が非常に著しくなつて來たため、それが幾つにも分れ、その範圍に種々な專門教育が行はれて居る。醫學は其の一つである。

物理學、天文學もさうである。而して宗教と離れて獨立して來たために、最初含まれて居た迷信的分子も段々なくなり、純粹に學術的に分つて來て居る、その中に含まれて居る藝術は普通教育の中にも含まれて居るけれども、それが獨立して音樂學校の教育、美術學校の教育となつて殘つて居る。政治生活は普通教育の中にも入らなければならぬが、專門教育としては政治學とか、法律學を專攻する人があつて、專門教育として殘つて居る。經濟生活の方からは一面にはそれが或る部分まで取り入れられ、普通教育の內容となつて來たが、一面には玆に所謂實業教育なるものが非常に大なる系統を爲し發展して來た。道德的の生活はこれは總ての人に共通であるから、專門教育に於ても之を離れることは出來ず、普通教育に於ても之を離れることは出來ないことになつて居るのである。それ故今日の普通教育でやつて居る所の仕事を見るとよくわかる。國語は學校に入れば習ふ、字を習つて書物を讀むことを教へられるが、それは僧侶階級がやり始めたのである

又今日に於ては體操をやつて居るが、さういふことをやり始めたのは貴族、武士の階級で、今日に於ては誰人もやることになつて居る。又實用的算術、百分算、利息算は小學校に於て教へて居るが、それは町人階級がやり出したのであるけれども、これも誰も必要なものであるからやつて居る。唱歌は僧侶階級の中にも音樂として入つて居つたが、今日では誰でもやつて居る。それと同樣に今日の教育で手工をやるけれども、それは必ずしもそれに緣の近い職業に從事する人の爲にやつて居るのでなく、唱歌を平民階級でもやはりやらなければならぬと同樣に、異つた階級の人に於ても手工はやらなければならぬ、人間として必要なものであるといふことが分つて來た、故に貴族の子弟を教育して居る學習院に於ても手工をやつて居る。斯くして普通教育が行はれ又一方には專門教育が分れて來たのである。そこで斯の如きことを言つても實際の問題に餘り觸れて來ない感があるが、一つ言はなければならないのは職業教育問題である。

第五節　職業教育

西洋に於ても希臘時代に行はれた教育がやはり文武兼備の教育であつて、それは生産經濟に關係する意味の職業なるものには觸れなかつた、而もそれが教育としての本質であるかの如く考へられ、それが極く近い時代まで教育學說の中に取り入れられて居る。それであるからヘルバルト派の教育學でも、特殊の社會階級、或は職業の爲にする準備は含まれないことが能く書いてある。ところが能く考へて見ると僧侶の受けた教育は僧侶の職業教育、武士の受けた教育は武士としての職業教育で、實は職業教育ならざるものは何處にもないのである。それ故文武兼備を理想とし生産經濟には全く觸れない教育は武士階級の教育なのである。今日となつて來ると左樣なことは言つて居られない、卽ち人間生活のあらゆる方面に教育が觸れて來なければならぬ、それは旣に町人階級が組織的教育を受ける時か

ら生産經濟に觸れて來たのであるから、當然我々は普通教育の中にさういふ考を加へなければならぬ。そこで今日となると職業教育が何か卑しいものであつて、それを普通教育の中に取り入れることが教育理想の墮落であると考へることは最早許されないことになつたのである。併し過去の習慣に囚はれて居て、さういふ考が何處かに殘つて居るが、それは餘程考へ直さねばならぬと思ふのである。今日に於てもまだ職業教育を排斥する人が多少ある、殊に我が國の教育者は斯樣な考に囚はれて居るのであるが、世界全體から見れば餘程その傾向は變つて來て居る。これも最近外國の教育狀態を見てそれと比較して見る必要があるが、これは第三章に於て述べる考であるが、補習教育なるものがある。最初これは必ずしも職業的意味は有つて居なかつたのである。これは牧師などがやり出したことで、日曜に學校を卒業した若者を集め、讃美歌を唱はしたり、簡單な御說教をやつたり、或は國語算術の復習をして居つたのが始りである。それが段々と發達して來

ると、何時の間にか實業的分子が加つて來て今日の補習學校となつたのである。それが獨逸に於ては戰爭前から既に餘程發達をして居り、而して補習教育なるものは義務教育の一部分を爲すことになつて居つたが、今度の戰爭に依つて益々其の考を廣く世界に擴めることになつたと言つてよいのであつて、千九百十八年に出來た英吉利の新教育法に於ては戰爭前から獨逸のやつて居つたのに習つて、小學校を卒業してから滿十八歳までの補習教育を義務教育の中に加へることに決つて居るのである。佛蘭西に於てもやはり實業補習教育の必要を認め、實は英吉利の如く法令に規定して劃一的に義務補習教育をやる考があつたのであるけれども戰爭後佛蘭西は非常なる疲弊を來し、その財源に苦むがために、非常に熱烈なる希望はあつたにも拘らず之を實行するところまでに至つて居ない。併しながら政府は之を頻りに奬勵し、時々吾々が手にする報告に由つても、最近數年間實業補習學校の新設を頻りに勸め、相當に數も多くなつた樣子である。殊に農村に於ける

農業補習學校を頻りに奬勵して居るのである。亞米利加に於てもやはり補習教育を奬勵しなければならぬと云ふ說が頻りに出て居るのみならず、非常に大仕掛のことを現在やつて居る。それは千九百十七年から實施することになつたスミスヒューズ法なるものがあつて、其の法律に依ると、其の法律の制定になつた年から向ふ十年間職業教育奬勵の爲に澤山の豫算を取り、而してそれを合衆國全體に分配して職業教育を奬勵することになつて居て、今それが實行せられつゝあるのである。それは千九百二十六年で終ることになつて居るが、更に期限を延長して先きまで實行することになるであらうと吾々は想像して居るのである。それは小學校に於てやつて居る實業的科目にも奬勵金を與へるが、中學程度に於てやつて居るものにも奬勵金を與へる、專門的の處にも出す、のみならず其の爲めの教員養成にも其の金を使ふことになつて居て、非常に大規模のものである。故に職業教育奬勵は亞米利加に於ては今日非常に重いものになつて居る。斯樣に職業教育が盛

になつて來ると共に斯の如き現象が起つて來たのである。以前は普通教育の學校と職業教育の學校とははつきりと區別せられて、小學校などは職業教育には觸れない普通教育の場所である、中學校も高等普通教育の場處であつて職業教育の場處ではないと云ふ風に考へて居たが、職業教育が重視せられることになつて其の境界が不明瞭になつて來た。小學校の中にも職業教育の分子が加つて來、中學校にもそれが加つて來た。更に又職業教育の學校に於ても普通教育の分子が加つて來、兩方相接近して來て其の境界が不明瞭となつた。殊に此の現象は亞米利加に於て著しいのである。之に對して種々議論がある、例へばスネッデンス、コロンビヤ大學總長などは何れも實業教育を說いて居る人であるが、やはり普通教育と職業教育とははつきり區別して置いた方がよいといふことを主張して居る。併しながら左樣なことに拘泥する必要はなく、兩方から入り混つても差支ないものだと主張して居る學者もなか〳〵あつて、頻りに議論が交換せられつゝあるので

ある。實際の狀況から見れば著しく兩方から入つて來て解け合つて居る、恐くは將來に於てはさういふ傾向が强くなつて來るであらうと考へられる。それと目下我が國に於て問題となつて居る義務教育年限延長問題を結び付けて考へると、世間でも言うて居るが、八學年となれば其終りの二學年は實業的教育が這入つて來るであらうと私は思ふ、必ず又左樣になるであらうと考へる。序に最近非常に喧しく言つて居る職業指導のことを簡單に述べると、職業指導といふのは亞米利加に於て頻りに喧しく言つて居るのであるが、これは何を意味して居るかと言へば、學校生活と職業生活の間の連絡を付けることである。そのために如何なることが實際に試みられて居るかと言へば、これは區々であつて必ずしも一樣でないが、大體からいふと成るべく學校の生活を實際社會生活に近づけ、殊に職業生活とが餘りに懸け隔つたものでないやうに學校の課程を組み立て、教授法を工夫しなければならぬと云ふことが一の要求である。次に職業世界の狀態を知らせることが必

要である。職業世界とは、世の中には一體如何なる種類の職業があるかと云ふこと、その各々の職業に這入る爲には如何なる修養が必要であるか、その職業は社會共同生活に對し如何なる意味を有つて居るか、それに從事して居る人は自分の立場として如何なる影響をその職業から受けるか、社會的地位は如何に世間から見られて居るか、その職業に從事して居る人は自分の修養の暇があるか無いか、その職業に從事して居る者は自分の健康上如何なる影響を受けるか、又それ等の職業に從事する人は社會全體から見て如何なる割合で必要であるか、或る種類の職業は必要であるけれども其從業者は割合に少數で宜いものもある、又多數の從業者を必要とするものもある、左樣なことも知らせて置かなければならぬ。小學校及び中學校の終りに近づくと特別の時間を設けて居る處が尠なからずある。それだけでは未だ足りない、子供が如何なる風に職業に向ふかを見て相談相手となつてやらねばならぬ。そこで子供の樣子を小さい時から始終見て知つて居る所の

受持先生なり校長なりは、此の子供は如何なる仕事をやらせたら成功するだらうと絶えず注意して見て居て、而して愈々卒業の時に相談相手となつてやる、といふことをしなければならぬ。それには平素唯漠然たる觀察をやつて居るばかりでなく、此頃流行する精神檢査を用ひ、如何なる方に向くかといふことも行はれて居る。或る場合には寧ろそれが中心であるかの如くやられて居るのであるが、私は狹く限るべきものではなからうと思ふ。もう一つはさうすると實際唯話を聞いただけでは能く分らないから、職業其ものに必要なる技術を敎へる程度まで至らなくとも、それに對する理解を與へる意味に於て或る程度の職業的練習を少しくやらせて見ることもある。それが小學校の上級、或は中學の上級に於て時々試みられて居るのである。今では純粹の職業敎育でなく、つまり職業に對する理解を與へるといふ程度の一種特別の敎育が現れて來た。之を文部省の森岡常藏君は準備職業敎育と名づけて譯して居る、此の準備的職業敎育が此頃彼方此方に試みら

れて居るのである。

此の職業指導の問題は必ず我が國に於ても今後行はれることであらうと信じて居るが、然らば子供の身體の狀況は必ず職業を選擇する場合に考慮の中に加はらなければならぬ譯で、精神身體の側からも同時に見なければならぬ。斯の如くなつて來ると其の全體を引括めて言へば、普通教育と專門教育と分れて普通教育は誰でも受けることになつて居て、それから先になるとそれ〴〵違つた道を選んで行くことになるのであるが、其の場合に昔と今と違つて居ることが一つある。昔は普通教育を終つて後如何なる方面に向つて行くべきかといふことが、主として如何なる社會階級に屬して居るかに依つて決定せられたのである。今日に於ては如何なる社會階級に產れたかを見るよりは寧ろ子供達の身體なり、精神狀態なりを見て、如何なる方面に向くかを見て決定しなければならない。その考は今日の職業指導の中にも深く這入つて居るのである。それで亞米利加人が能く獨逸の教

育と比較し、亞米利加流の職業指導の意味を說明する場合に斯の如きことを言うて居る。獨逸に於ては戰爭前までは非常に社會が階級的になつて居つた、故に如何なる職業に入るべきかは如何なる家に生れたか、如何なる社會階級に生れたかに依つて殆ど決定せられたのであつたが、吾々の國に於てはさに非ずその子供の體質なり、精神狀態に依つて其の素質に適當した職業に入り込ませることを考へねばならぬ、これ階級主義の過去の獨逸の教育とデモクラチックの亞米利加の教育の相違であると言うて居るが、確かに其の相違はある。將來は階級が向ふべき處を定める處にならないで、身體及び精神上の性質が標準となつて定める處となるであらうと思ふ。斯の如くなることが、卽ち均等なる機會に依つて教育を受けることであるが、其の均等なる機會に依つて教育を受けることについては、最近戰後の各國の教育改造に於て現はれて居る種々の試み、或は傾向を述べる必要があると思ふが、これは次項に讓ることとする。

第六節　階級か素質か

現在の社會狀態から見ると、門地階級といふものは殆んどなくなつて來て、華族の名義だけ遺つて居るだけであつて、今日の華族も世襲または互選で貴族院に議席を有する外は他の者と平等になつて居る。他の國にもさういふ制度はあるけれども、別に昔の門地階級の如きものが遺つて居るとは多くの人は考へてゐない今日に於ては門地階級はなくなつたけれども金持と貧乏人があるといふことは免れない。隨つて教育を受ける場合に假令頭腦の良い人であつても、學資がなくて高等の教育が受けられないといふことが今日でも澤山あるわけである、それが除かれない限りは其人の素質に基いて、その受けるべき教育の程度方針を定めることは徹底的には行はれない、そこで種々な方法で貧富の懸隔から生じて來る種々の弊害を除かうと苦心して居るわけで、それが今日では大問題になつて居る。それ

を社會制度の改革の方面、或は經濟組織の改革といふ方面からやつて行かうと考へる人もあるが、それはそれ等專門の人々に讓つて吾々は直接に深く關係しない唯だ教育上の問題として玆に現はれて來たのは、大戰後各國で起つたところの一の運動である。獨逸に革命が起つて新憲法が制定せられた時に種々な事が規定せられた。此の新憲法は餘程從來の憲法と違つたものであつて、單に議會の權能とか、行政權と議會との關係等が規定してあるばかりでなく、種々の問題が其の中に包含されて居つて、教育に關した事等が澤山其の中に規定されてある。その一に、優れた素質を有つてゐる者は公の費用を以て中等以上の教育を受けしむべしといふことがある。これを自分は俊才簡拔と譯してゐるが、內容を解り易く云へば、俊才公費教育と云つても宜い。今日の獨逸は非常に疲弊してゐるから、理想ばかり高遠であつても金が足りない爲に事實に於ては今日まで餘りそれが行はれてゐない有樣であるが、主義だけは憲法の上に規定されてある。斯ういふことが

獨逸の憲法に規定されると、それが周圍の國に刺戟を與へて、諸國に於ても同樣の問題が起つて、佛蘭西でも頻りにさういふことを唱へて實行しようとしてゐる佛蘭西では最近の樣子はわからぬが、昨年中或る雜誌に書いてあるのを見ると、幾分かさういふものが出來掛かつてゐるやうである。それには種々の方法があるが、フランスでは地方々々に於て有志の寄附を募つて財產を造り、それに政府の奬勵金を加へ、その財產の利息に依つて其の地方々々の俊才に奬學金を給して行かうといふので、既に處々の地方に奬學給費財產の如きものが大分出來掛かつてゐる樣子である。その他の國ではどの位の程度に進んでゐるか知らぬが、方々でさういふやうなことはやらなければならぬといふ議論が盛に起つてゐる。それで從來此點に就いて西洋各國と日本とはどういふ風に變つて居つたかと云へば、日本でも近頃になつて或る一私人が金を出して、その地方の俊才に對して學費を給してゐる處もあり、又縣の奬學資金、郡の奬學資金の如きものもあり、又藩のあ

つた所では舊藩主が主なる出資者となつて奬學資金を出してゐる處もあつて、多少さういふものが出來てゐるけれども、その數は極めて少い。所が諸外國に於ては從來奬學資金の財團の如きものは隨分に澤山あり、又相當に財產を有して居つて、その金に依つて學問をした者も少くなかつたのである。殊に亞米利加に於てはカーネギーといふ富豪があつて、斯の如き事業のために金を出し、カーネギー財團なるものを造つてゐる。それは單に奬勵金ばかりでなく、種々な事業をして中學校の學用品教科書迄給してゐる。その他にも同じやうな性質のものがあつて學資を得ることの出來ない俊才が之に依つて高等の教育を受けることが出來たのであるが、更に徹底的に國の力を以て之を行ふといふのが現今の運動である。目下の日本に於ては經濟上の餘裕がないから、之を容易に實現することは出來ないであらうと思ふけれども、外國に斯の如き運動が起つて見れば、そのやうにありたいと吾々も希望してゐるのである。若し斯の如きことが出來ることになると、

今日經濟上の方面から起つ所の難問題、卽ち資本家と、勞働者、有產階級と無產階級の調和等といふことも餘程圓滑に行はれるやうになつて來ることと思ふ。

第三章　教育事業及機關の分化

第一節　普通兒童と異常兒童

此章に於ては今日行はれて居る所の教育の全體に亙つて說明しやうと思ふ。其の問題に入るには通常兒童と異常兒童とを區別して考へることが必要であると思ふ。兒童は身體の上から見ても、精神の上から見ても、極く優れたものと極く劣つた者との間に無數の階段がある。而もそれは何處が境界といふことなくして、優れた者から次第に劣つた者といふことになつて居るのである。世間の人は往々これを誤解して、此の俊才なる者は普通の人から飛離れてずつと違つた者で、優れた者はずつと高い處に在つて、それから離れて中等の者があり、更に低能兒、

或は劣等兒といふものはずつと低い處に在つて離れたものの如く考へて居る人がある。一般にさういふ問題に就て學理的に調べない人は、優れた者から劣つた者の間にもそれ〳〵程度の違つた兒童があることを考へてゐない。けれどもさうではなくして次第に進んで來るのである。

劣等兒の數は少くて、中等兒になるほど數が多くなつて、次第に俊才になるに從つて又數が少くなつて來る。それであるから普通兒童、異常兒童と云つて判然とした差別が其の間に立つて居るものでないといふことを最初に考へて置かなければならぬ。併ながら教育機關なるものを多數を相手にして多數の要求を個別的に滿たすやうにするには非常な金と人とを要することになる。そこで大體に於て多數の要求を滿たすやうにするには、假りに何處かに其の境を立てゝ、異常兒童と通常兒童とを別々に扱つて行くことが必要である。併しそれは便宜上の問題であつて、或る點に境界線を引いて、これから上は普通兒童、これから下の一方は

劣等兒童、一方は秀才といふことになつて、一方に對しては劣等兒、或は低能兒特別教授が起り、一方に對しては天才教授といふことが起るのである、この通常異常と別けた時には、異常の方を低能兒と天才とを一に込めて區別するのである、實際の取扱に於ては低能兒と天才とは非常な差があるが、普通の兒童が大多數であるから、それを捕へて、それが如何に行はれて居つて、如何なる機關に依つて行はれて行くかを知らうと思ふのである。

第二節　家庭

これは普通兒童と異常兒童とを問はず通有の問題であるが、最初の教育の場處は何處かといへば家庭、卽ち家である、家庭は最も自然なる教育の場處であり最初の教育場處である、元來家庭なるものが何故に必要になつて來たかに就いては社會學者或は倫理學者等が種々考へて居るが、少くとも兒童を教育するために父

と母とが一つ處に住居しなければならぬやうになつて來たことは、吾々が家庭を組織するに至つた唯一の原因でないにしても、其の主もなる原因でなければならぬと思はれるのである、鳥等は卵を產み、それを孵化して、巢立ちをするまでは雌雄一つに棲んで居るが、鳥の巢は住む場處ではなくして子を育てる場處である巢に住むのは子を育てる時期だけである、人間になると子供が大人になるまでには非常に長い年數が掛かるから、それが永久的になつて家庭といふものを作つたものであらうといふ說は、私は尤もな考であらうと思ふ。此處では此敎育の基礎になるべきものが與へられて、それから後の敎育に對して家庭の敎育は非常に重大なる意味を有つて居るのである。所がその家庭なるものは非常に變つて來て、昔の家庭と今日の家庭とは餘程狀況が違つて來た。そのために敎育上種々の問題が起つて來た。昔は父親は外に出て働き、母親は家に在つて子供の世話をしたり何かして居つたものであるが、今日はさういふ事が出來ないものが多くなつて來

た。そこで父も母も共に工場に行つて働いて居ると、子供の世話をする者がなくなるから、これを世話をすることを考へなければならぬ。小さい子供の方から言へば、最初は母親が家に居つて乳を飲ませてゐたが、それが事實出來ないことが多い、さうすると何處か他に預けなければならぬ。それで方々の國で、學校衛生の方では一定の譯語を極めて居るか知らぬが自分は乳兒館といふ言葉を使つて置く、これは日本で一番早く用ゐられた言葉で、佐藤信淵の著書の中に現はれて居る。乳兒館は乳兒を預つて世話をする處で、獨逸ではクリッペ、亞米利加ではデーナースリー、佛蘭西ではクレシュと云つて居るが、さういふものが出來て來た。母親が工場に行く時に預けて出て、歸る時に連れて戻るのであるが、街にさういふものが一ヶ處か二ヶ處しかなくて、場處が離れて居ると、出掛けに預けて歸りに連れて戻るといふことしか出來ないが、工場に附屬した乳兒館、或は乳兒室を有つて居るともつと便利がある。午前に一回とか午後の一回とか二回の休憩時間

を利用して母親が子供に乳を飲ませることが出來るが、街の眞中に一つあつて其處に集めるとなると、母の乳を飲むことが出來ないから、人工榮養に依らなければならぬ。主として牛乳を飲ませることになるが、牛乳を飲ませることになると非常に面倒な問題が起つて來る。それで成るべく母乳榮養を取らせやうといふので工場に乳兒室を置き、看護婦のやうな者を置いて、休憩時間には親が驅付けて乳を飲ませるやうにした方が理想的のやうである。東京市内にも近頃は出來て居る、就中鐘ヶ淵の紡績に設けられてあるのは可成り世間に知られて居る。是は極く小さい子供のことであるが、それが少し大きくなつて來ると獨り遊びが出來るやうになる。さうすると別の處に子供を預けるのであるが、それが托兒所である。托兒所は東京には澤山あるし、地方にも大分出來たやうであつて、これは珍しくないが、此の托兒所の仕事は、知識を進めるよりも寧ろ身體を健全に育てることに傾いて居るのであるから、此等はやはり醫師の方に屬することで、普通の教育

の側の者だけでは手の屆かぬことがあると思ふ。此の托兒所も佐藤先生の書物には既に出てゐて、遊兒館と名付けられてある。

子供の乳といふものは非常に大切な問題であるところから種々なことをやつて居る。何れの國に於ても牛乳に就て種々研究をして居る、殊に此貧乏人の子供に成るべく新鮮な牛乳を廉く別けてやる爲に設けられて居る。亞米利加の言葉で云へばミルクステーション、之を私は授乳所と云うて居るが、ミルクステーションはどういふことをやつて居るかと云へば、紐育等は非常に大きな街であるから、其日の朝飲む牛乳は、東京の如く前の晩に近處の牧場で搾つた牛乳が來る譯でないから、大きなタンクに容れて、何列車といふものが毎朝中央ステーションに集つて來る、牧場は何十哩、何百哩の遠方から來るから、その輸送の間に變質したりなどして困るのである。それで其の授乳所には成るべく新鮮な牛乳を集めて、其處には醫師が附いて居つて、子供の生後日數に依つて適度に牛乳に水と砂糖を

割つて、第一種牛乳、第二種牛乳といふ風に別けて、分量をきめて夫々形の違がつた壜に詰めて置き、子供が乳を貰ふ場合には、これは生後何ヶ月であると云つたゞけでは決して渡さぬ、必ず母親が附添つて來て、醫者の診斷を受けて、この子供ならばどれだけの分量の牛乳といふことを定めて貰つて來るやうにして居る。これが授乳所の仕事で、その經費支辨は慈善團體の如きものがやつて居る處もあり、市町村がそれに對して補助を出して居る處もあるが、日本では母乳榮養が行はれて居つて、人工榮養は稀であるから、此の問題は左まで重要視されて居ないかも知れぬ。日本の狀態から見ると、其日暮しの貧乏人の階級よりは寧ろ富裕に暮して居る人が、母親が子供の世話をするのが面倒だとか、容貌が惡くなるからといふので、人工榮養を採つて居る位で、貧困の爲に人工榮養をするといふことは少いやうであるが、やはり日本でも工業が發達すると、貧困であるがために子供に牛乳を飲ませることが出來なくて、已むを得ず人工榮養を採らなければならぬ者が多くなつて來る、さうなると此の授乳所の問題も考へなければならぬことと思はれるのである。

それから此の家庭といふのは學校に入る前の子供の教育處であるのみならず、學校に入つてのちも、學校に居る時間の外は家庭で育てるのであるから、子供に取つては非常に大切な場所であるが、世の中が忙しくなつて來ると、貧乏な家庭は朝から夕方まで戸が締つて錠が下りて居つて、鍵は母親が持つて居るといふことであるから、子供は勢ひ學校が濟んでも自分の家に入ることが出來ないで、門の前でうろ〳〵遊んで居るより仕方がない。それがために此の救濟法として設けたものがある。それは何と譯して宜いか一定の譯語が出來てゐないやうであるが放課後の兒童の預所である。其處では豫習復習をさせるが、そのほかに何か手藝を課して、編物をさせるとか、帽子の飾りをするとか、或は狀袋を貼るとかいふやうな仕事をさせて、それを賣つて、その賣上高を各兒童の貯金として預けさせ

て居る處もあるが、さういふ風に仕事をさせて工賃を貯金させて置くことは非常に教育上有益なやうである。この方法で成功したと云はれて居るのは瑞典である。瑞典では早くから此の事業が起つて、又餘程成績が良いと聞いて居る。斯かる事もやはり工業組織の變革と共に家庭の生活狀態が變つて來たために已むを得ず起つた一種の教育機關である。今日では家庭といふことだけでは足りないから種々なる事が起つて來るのである。

第三節　初等學校

次には學校に入るといふことになる。其の學校に入る時期が問題であると思ふ。現在に於ては大抵の國が滿六歳を境として入學期間として居るが、併し是は學理的の兒童研究とか、或は兒童心理學等の研究の結果から滿六歳が適當であると斷定された譯ではなく、長い間の習慣に依つて滿六歳位が適當であらうといふこと

になつて居るのである。大體滿六歳位になると規則正しい學校の教育が受けられると考へて居るのである。併し國に依つては異つて居つて、例へば英吉利の如きは家庭教育の補ひとして、幼稚園の制度其ものを小學校に附加へて、尋常小學校の一年に幼稚級なるものが附いて居る。この幼稚級なるものは亞米利加、或は日本で行はれて居る幼稚園とは多少異つた所もある。日本、或は亞米利加の幼稚園では、幼稚園の間には數へ方、書き方、讀み方はやらないで、唱歌、遊戯、種々の手藝をやつて居るが、英吉利の幼稚級では極く簡單なる讀み方、數へ方、書き方等も少しやつて居るので、幾分小學校に近いものになつて居る。そのために英吉利では小學校の入學は滿五歳からになつて居る。それは極く稀れで大抵は滿六歳になつて居る。所が此處に一つの問題がある、今日では過去の習慣に依つて滿六歳を入學期と考へて居るが、それは果して適當であるかどうかといふ疑問が起つて來る。兒童の發育の狀態なるものは必ずしも年齢に伴はないものであつて、

成育の遲れて居る者と進んで居る者とあり、それが精神の側にも身體の側にもある。近頃生活年齡と云ふのは出生日を基として計算した年齡で、それから精神の發達の狀態から見た年齡を精神年齡と稱して、身體の發育の上から見た年齡を生理的年齡と云つて居るが、近來精神檢査といふことが盛に行はれるやうになつてそれで精神年齡を定めることを考へて居る。それは如何にしてやるかと云へば、彼のメンタルテストと稱する精神檢査を澤山の兒童にやらせて、極く小さい子供は或る程度まで出來る、もつと進んだ子供にはもう少し進んだ程度まで出來るといふ問題を作つて試驗をする。卽ち何百人、何千人の子供を試驗をして平均をすると、滿六歲ならば此の試驗に依つて何點取るといふ標準が出來るから、滿六歲の者は此の試驗に依つて何點取らなければならぬといふことになる。それで精神檢査をやつて何點かを取ると、豫て作られた標準に照して此の子供は精神の發達は何歲に相當すると定めるのであるが、その精神年齡に依つて入學時期を定める

ことが適當であるといふ議論が盛になつて居る。併し今日に於ては大體に於て生活年齡に依つて入學期を定めて居るが、將來は生活年齡でなくして精神年齡といふことに依つて入學時期を定めるといふことになるかと思ふ、例へば八歲になつて居つても、遲れて居る子供は入學させない、六歲であつても進んで居る子供は入學させるといふことにしなければならぬことゝ思ふ。これと共に考へなければならぬことは身體の狀態である、又子供の身體の發育狀態を見てそれが入學に適當して居るかどうか、又どれ位迄發育して居れば小學校に入學させるに適當であるかといふことを定めるとか、種々の問題が起ると思ふ。

次には問題が變つて、學校系統の立方の根本主義に就て述べようと思ふ。自分は大體斯ういふ風に學校系統の立方を區別して居るのである。一は歐羅巴式の立方、一は亞米利加式の立方と云つても宜いが、或は歐羅巴式の事を階級主義と云ひ、亞米利加式の事を平等主義と云つても宜からうと思ふ。歐羅巴の方の學校は

長い歴史的關係を有つて居つた爲めに、今日の所謂小學校が發達する前に、日本で云へば漢學塾に相當するやうな程度の高い學校があつて、それが中等學校につて居つた。その後から平民階級のために別に小學校が出來たので、その間の聯絡がなくなつて居る。この制度の最も代表的のものは革命前の獨逸のやり方である。獨逸では小學校を平民學校と云つて居るが、平民學校は滿六歳から始つて八學年で終ることになつて居つた。其八學年の小學校を終つてから中學校に行くことが出來ずして補習學校に行くことしか出來ない、何故かと云へば、中學校は滿九歳から始まるのである。九歳になるまでは家庭教育を受けて居るか、或は中學校の豫科に這つて居るのである、而して滿九歳で入學すると直ぐ外國語を敎はるのである。然るに平民學校に入つた者はそれを卒業する迄外國語を敎はらない。滿六歳から八ヶ年であるから滿十四歳になる、一方中學校の方は滿十四歳になれば餘程進んだ外國語をやつて居るから入學試驗を受ければ中學校に入學することは出來る規則になつては居るが、實際に於ては難かしい。外國語の試驗を受けて中學に入ることは不可能の事であるから、勢ひ一旦平民學校に入つた者はそれで行止まりである。中等以上の教育を受けようと思へば、最初から中學校の方に入つて行かなければならぬことになつて居つたのである。亞米利加式の方は日本と同樣滿六歳から始まると、其處へは貴賤貧富の別なく入學することになつて居る。而して小學校は原則として八學年であるが、その八學年を終つてから中學校、或は女子中學校に入學することになつて居る。所が獨逸は滿六歳の時に一旦平民小學校に入れば其人間一生の運命は殆ど定められて了ふ。さうなれば平民學校に入る者は名の通り中以下の子供、中學校に入る者は貴族、或は富豪の子供といふことになるから、自然その間に思想感情の隔離が起つて來る、それで豫て獨逸に於ても斯の如き學校制度を廢して、亞米利加の如く尠くとも最初の或る時期は總ての社會階級を通じて同樣の教育を施して、それが了つてからそれ〴〵の學校に別

れて行くことにしたいといふので、餘程以前、十九世紀の半ば頃から統一學校運動なるものが起つて居つたのである。この運動に就いては社會民主黨は統一學校主義で、貴族富豪等の保守派は統一學校に反對し、又平民學校の先生等は統一學校運動の味方で、中學校の先生等は反對の態度を取つて居つて、兩派頻に相爭つて居つたのであるが、此統一學校運動者の中にも、四ヶ年說と六ヶ年說の兩說に別れて居つて、六ヶ年は理想ではあるが實行が出來ないから、マア四ヶ年だけでもといふことになつて居つたのであるが、元來獨逸の社會が階級的に出來て居つたために容易に實現が出來ないで今日に至つたのである。所が今度革命が起つて社會民主黨が勢力を占めることになつたために之を憲法の中に規定することになつた。併し六年統一學校說は成立たなくて四ヶ年になつたが、憲法には統一學校と云はないで基礎學校といふことになつて居つて、四ヶ年の基礎學校を總ての人に受けさせることにしそれを經た上でなければ中學校に入れないことにしやうと

いふことになつた。此處にもやはり教育上の機會均等といふ意味が能く現はれて居る。併し是も金の問題でまだ實施はされてゐないが、これからは次第に改まつて來ることであらうと思ふ。

それで歐羅巴に於ける獨逸以外の國はどうであるかと云へば、英吉利でも、佛蘭西でも、元はやはり階級的になつて居つて、高等學校と中等學校との聯絡はして居らなかつたが、普通の小學校から中學校に進入する途が開かれて居つたから獨逸の如く急激の改革はなくて漸次に緩和されて來た。

日本は此の問題に就いては非常に幸福な位置にあるのであつて、明治五年に學制が定められて、昨年の秋其頒布祝賀會が所々で行はれたほどである。此の明治五年の學制の大體の仕組は、佛蘭西の學校制度を基にして居つて、大學區、中學區、小學區等は佛蘭西の丸寫しである。所がその時分の佛蘭西の學校は獨逸流の階級主義であつて、亞米利加流になつて居らなかつた、それにも拘らず日本の小

學校と中學校との間は亞米利加式を採つて居つた。それは當時學制の草案を作られた人の卓見であると思ふ、獨逸が漸く今度の戰爭の結果として實行したやうなことを、日本では既に明治の初年に實行して、而も明治の新教育の基礎を定める所の學制にそれが規定してある、これは非常に結構なことである。

世界大戰のために前述べた如き獨逸の改革が起つた、隨つて此の中等學校の方も相當の改正が行はれなければならぬ。獨逸の從來の中學校はそのまゝ殘つて居るが、それは四年の基礎學校を卒つてから入學することになつて居る。而して尙中學校に進入しないで、そのまゝ基礎學校に在學して所謂小學校教育を八學年受ける者がある。これ等の者で後になつて中學校に入りたい者は、其處で新しい種類の中學校に入れるやうにしようとして居る。それは前に述べた高等獨逸學校で、外國語を主としないで、獨逸文化を中心として居る學校で、外國語が少ししか入つてゐないのであるから、小學校を卒業した者、或は卒業間際の者が其處に入れ

ることになつて居るのである。今度の制度も餘り徹底的にはなつて居らぬが、前の制度から比べると餘程緩和されて居るのである。

第四節　中等學校

中等學校は日本では唯だ一種類しかなくて、學科の時間の配當其他に極めて僅許りの手加減をする位なものであるが、諸外國に於ては中學校の種類が幾種類にも分れて居る。國によつて多少の違ひはあるが、之を概括的に云へば、希臘語、羅典語等を主として居る古典學校が一つ、獨逸では之をギムナジュームと言ひ、英吉利ではクラシックサイドと云うて居る。それから現代の外國語、佛蘭西語とか、英語とか云ふやうなものを中心とした中學校が一つ、それから數學、物理學の如き科學を中心とした中學校がある。大きく分けると先づ此の三つに區別することが出來ると思ふ、これはそれ〳〵の學校に分れて大體問題が決着したやうに

なつて居るのであるが、十九世紀の間に於て絶えず其の間に議論があつた。それは如何なる議論かと云へば、最初は、中學校といふものは古典主義でなければならぬ、現代語主義でなければならぬといふ、各主義々々があつて相爭つて居つたが、それが遂には別れ〳〵になつて、現代語主義は現代主義、科學主義は科學主義の學校と別々に立てることになつて居つたのであるが、所が日本は折衷主義になつて居つた。尤も折衷と云うても古典主義は極く僅かしか現はれて居らぬ。日本では希臘語、羅典語はやつて居らぬが、漢文は之に相當するものである。併しそれも今日では餘程少くなつて居るから、古典主義は漸く痕跡を遺して居るに過ぎない。今日の日本の中學校は科學主義と現代語主義の折衷である。今日以後斯ういふ點に就いて問題が起つて來ると思ふが、先年中學校長協議會が開かれた際にも漢文廢止の問題が提出された。それが實行されゝば愈々古典主義が無くなつて現代語主義と科學主義が殘るわけである。諸外國に於ては前述の如く分れて居

るが、最近になつてそれを成るべく便宜に取扱つて融通を附けたいといふ考が起つて來たから、種々なる企てが試みられて居る。其の一は獨逸の改良中學校と稱するもので、此の三主義が分れるために違つて來る所の學科を成るべく高い學年に讓つて置いて、最初の學年では共通學科を敎へるといふことになつて居る。フランスの中學校も稍之に似てゐる。英吉利ではやはり思ひ〳〵の學校を立つて居つたけれども、一の學校に古典部、現代語部、科學部といふ風に分れて居る。亞米利加でもさう云ふ風になつて居る處が多い。

所が亞米利加では一つ異つた制度をやつて居る。これは選擇科目制度と云うて一の中學校の中に種々の敎科を設けて置いて、生徒が自由にそれを選擇することが出來る、共通の科としては唱歌と體操位で、その他は總て選擇科目になつて居る。選擇科目は其の一を選んでやると、來年は其の科目の二年生になり、其の翌年は三年生になるが、三學年になつて、途中で他の科目を選ぶことになると、全

體としては三年生であるが或科目は一年生になるわけである。さういふ風に自由にして置いて、どういふ方面に向ふ者も一の學校で間に合ふやうにしてある。これを戰爭後獨逸に於ても實行しようと唱へて居る人があるが、まだ實際には行はれてゐない。之も一の方法であると思ふ。但し之にも種々の缺點は伴つてゐる。

それから亞米利加では日本と異つて中學校なるものの範圍が非常に廣くなつて居る。女學校も高等女學校と云はないで、男女共學の中學校も少くない。其他の實業中等學校もやはり中學校で、農業中學校、商業中學校、工業中學校と云つて居る。此の點は實業學校が中學校と別になつて居る日本や獨逸の制度と異つて居る。

中等學校の制度を述べた序にいうて置きたいことがある。此等の古典主義とか現代語主義とか、科學主義が相爭つて今日は大體結著したやうになつて居るが、その中で古典主義者が頻りに唱へることが一つある。中學校に限らず何れの學校

に於ても、或る學科を教へるといふ目的に二あつて、一は其の學科の內容を心得て居つて、それが直ぐ應用せられて吾々の生活の助けになるといふ意味で教へるのを教授上の實質主義と云ふ。例へば算盤を知つて居ると商業をするのに都合が好いといふ風に、其の知識を應用して何か仕事が出來るやうに教へるのである。所が之に反して、人は其教へられたことが直ぐ役に立たなくても、學んで居る間に吾々の精神が鍛錬せられるのであるといふ風に考へる人がある。それを形式陶冶主義といふのである。此二つの主義は昔から相爭つて居る。そこで古典主義とか現代語主義とか科學主義の爭が起つて來た時に、古典主義の人はどう云うて居るかと云へば、希臘語、羅典語を學校でやつても、社會に出てそれが直に役立つ譯ではない、けれども希臘語、羅典語をやつて居る間に吾々の思想が緻密になり記憶が確實になり、想像が豊かになつて種々の訓練が行はれて居るのであるからそれを棄てることは出來ないと唱へる。これは數學も同樣であつて、中學校で教

へて居る數學の中で、代數の稍々高等の部分等は實際社會の生活に於ては役に立たない、一昨年邊りであつたか、亞米利加の或る學校から亞米利加の相當名の聞えた人に手紙を送つて、「貴方方が中學校で學んだ中で、これだけは生活上利益のあつたといふのはどの程度までですか」といふ問を出して答案を求めたことがあるが、其大多數は加減乘除迄であると答へた。代數の二次方程式位から先の方は物理學の先生とか、或は工業の技師といふやうな者になると絶對に必要である。又其だけでは足りないで、微分積分も必要であらうが、通常の人民の生活をして居る者に必要なのは加減乘除位である。けれども精神鍛錬のためには、數學は捨てられないと形式陶冶主義の人は云ふのである。

それで形式陶冶主義と實質主義は爭つて居つたが、大體今日に於ては議論が結著して居る。昔は語學で養つた力でも其の應用せられる範圍が語學に限られないで、語學で思想が緻密になれば、政治上の問題に對しても緻密であるといふやう

に、一の學科で養はれた力は何にでも應用されるものであるといふ風に考へてゐたが、今日はそれを否定して、内容の上に於て共通のものでなければ、所謂力といふものは移つて行かないものである、故に語學で訓練せられたものは語學は達せられるが數學は達者でない、數學に達者の者であつても法律上の事に達せないといふことがある、であるから限られた範圍に於ての形式陶冶主義は良いが、唯だ漠然たる陶冶主義ではいけないといふことになつた。故に今日の教育に於てはそれが所謂力を練るといふ意に於ても、同時に其の學んだ事柄の内容が直ぐに役立つやうに考へて行かなければならぬ。實質的にも役立ち、同時にそれが力を練るといふことにもなるやうな學科を集めて其の學校の授業をしなければならぬといふことに大體なつて來た。さうなれば打擊を受ける者は古典主義の希臘語、羅典語なり、中學校の上級でやつて居る數學の一部分である。故に亞米利加の中學校に於ては共通には代數で云へば一次方式程位で止めて、二次方程式以上になると

選擇科目にして、例へば物理學とか、工業の事をやる者は二次方程式以上に進んで行くが、商業に從事するやうな者に對してはその代りに商業算術をやらせることになつて居る。それは悧巧な方法であると思ふ。我邦に於ても中學校の漢文と代數の一部分の如きは、將來問題になつて來るであらうと思ふ。

序にまた性別に就いて一言して置きたい。性別といふのは男女の別のことであるが、男女の別に依つて教育が變つて來なければならぬのは當然の事である。生理的にも異つて居り、心理的にも異つて居るのであつて、生理的、心理的に異つて居るといふことよりも尙重大の關係を有つて居ることは、社會の生活の上に於て男子のやる事と女子のやる事と異つて居るから、從つて教育上に於ても異つた要求の現はれて來ることは當然である。但し女子が男子よりも一般の能力の上に於て劣つて居るか、或は劣つてゐないかといふやうな問題は、最早今日では餘りやかましく云うてゐない。唯だ其の向ふべき方向が異ふのであつて、能力の上に

於て著しい差等があるといふことは考へてゐない。そこで問題になつて來るのは學校の授業をする時に男女を共同に教へるか、或は別に教へるかといふ問題、卽ち男女共學の可否といふことが一番大きな問題になつて來るのである。そこで小學校の程度に於ては、共學は餘り弊害があるとは考へてゐない、高等專門學校になると、男女共に相當に分別が出來て居るから、餘り差支があるとも考へられてゐない。男女共學の上で一番やかましく云はれるのは中等程度の學校である。日本では嚴重に中學校と高等女學校を區別してあるが、亞米利加では一緒になつて居る、而かも一の學級の中に男女席を列べて居るものが往々ある。これは大西洋沿岸に近い方には少いが、西の方の太平洋沿岸に近づくほど男女共學の所が多くなつて來る。日本でもそれを眞似て、男女共學の方が優つて居ると主張する者があつたり、少しも弊害が無いと主張する者等があつて、時々論壇を賑はして居るがこれは餘程考ふべき問題であると思ふ。吾々はどう考へて居るかと云へば、日本

では、中等學校に於ける男女共學は、少くとも今暫くは實行が出來ないと思ふ。高等專門學校になると幾らか弊害が少からうと思ふが、それでもまだ考物であるといふ位で、此の問題に就ては自分は保守的の考を有つて居る。それは何故かと云へば、此の男女共學論を唱へる者は多く亞米利加を本として唱へるのであるが亞米利加で行つて差支ないものは日本でも行つて差支ないといふとは出來ない。亞米利加と日本とは非常に國狀が違つて居るといふことを眼中に措いて考へなければならぬ。どう違つて居るかといふことを一々云ふことは困難であるが、一言にして云へば風俗習慣と女の心得方が違ふ。亞米利加では女がなか〳〵威張つて居つて氣位が高いから誘惑にかゝることが少いと云はれてゐるが、日本の女は無邪氣に出來て居るから、誘惑され易い。さういふやうな人達を共學にしたならば間違が起らぬとは云へない。自分は日本の女子が確つかりして世の中の事が判り誘惑されないやうになるまでは、男女共學は見合はせなければならぬと考へて居

る。併し何時迄も見合はせて居つたならば女子にそんな見識が出來て來ないといふ人もあるかも知れぬが、それは他に方法があらうと思ふ。

そこで今一つ、男と女の體格、或は生理的機能の上に現はれて居る相異が學業又行動の上にどう現はれて來るかといふ問題、これは生理醫學の側から研究しなければならぬ問題である。それから近頃喧しくなつて居る性教育の問題がある。自分は此の性教育に對して、惡い感を持たせないで十分に科學的に之を理解するやうなことが出來ればわるくもなからうと思つて居るが、自分は今日の我邦の女學生と男學生の實情から云ふと所謂性教育によつて性の生物學的說明を與へるよりも、寧ろ精神的の側に重きを措いて、前述べた如く男女ともに確つかりした考をもつやうにすることが必要であると思ふ。但しそれに對しては種々の說があつて、殊に醫學者の側から見れば又それ〳〵意見のあることと思ふのである。

第五節　中間學校

此の中間學校といふことは前に述べた教育上の機會均等といふことに關係を有つて居るので、世間には小學教育だけでは滿足することが出來ないが、併し中學校を卒業するまで學校生活を續けることが困難であるといふ人を收容するために設けられる學校を中間學校と云ふのである。前からあつたものでは獨逸の市民學校といふのがある小學校より一年か二年長くて一外國語が加へられタイプライターとか、簿記とか製圖といふやうなものがあつて、工業、商業の方面に向ふ者に都合の好いものが出來て居つた。之に能く似て居るので佛蘭西に高等小學校といふものがある。それから前からあつたが、近頃になつて大分出來て來たのは亞米利加の幼年中學校である。又英吉利には中央學校といふものがある。亞米利加の幼年中學校は小學校八年を卒へて二年位やるものもあり、小學校の七年から入つ

て三年やるものもあつて、形は區々であるが、中學校より稍々程度の低いものである。英吉利の中央學校は小學校半ばの志願者から優等生を選擇して、其處で一種特別の教育をやる。それを卒業すると普通の小學校よりも程度の高い、中學校よりも程度の低いものになる。斯の如き種々のものが處々に出來て來た、これは世の中の必要上から種々の事情のあるものに、其の事情の許す限りに於て最も高い程度の教育を受けしむるといふ趣意に外ならぬのである。茲に注意すべきことは、前に述べた準備職業教育なるものが其處に加味せられて來ることである。純粹の職業教育とまでは行かないが、職業教育の準備になるやうなものである。殊に亞米利加に於ける幼年中學校の如きは、最近非常に數が多くなつて來た。これは丁度日本の實科高等女學校の設立の條件が非常に簡易で、町立で高等小學校を立てる時に實科高等女學校を附設し得るために數が多いのと同樣で、幼年中學校は小學校に附設することが出來るやうになつて居るがために其の數が多くなつたの

である。日本の小學校が八學年になつて、それが義務教育になる時にはこの幼年中學校の制度が參考になると考へる。今日の高等小學校が義務教育の年數中に數へられることになるとすると、中學校と八學年の小學校との中間に何か一の教育機關が必要になつて來はしないか、或はそこに獨立の學校として成立つことが出來なければ、小學校の上の方の級が此の中間學校のやうな役目を兼ねるやうにするといふことも一の問題であらうと思ふ。

斯樣にして學校の教育が段々分れて來るが、此の中等學校を卒へると今度は專門學校、大學といふことになつて來る。それは種々の要件に依つて種々の學校が立つて居るのであつて、いま茲にそれを說明する必要もなからうと思ふ。

第六節　師範學校

最後にそれ等の問題の後に加へて師範教育に關し一言して置きたい。茲に最近

大きな問題がある、戰爭が終つて後に各國共義務教育延長問題が起つて居る。獨逸では戰爭前から義務教育は少くとも八學年であつて、其上の義務補習教育が附いて居つたのである。所が戰爭の終りになつて千九百十八に年英吉利の新教育法が制定せられた、それは發案者であり又文部大臣であつたフィッシャーの名をとつてフイシャー教育法と呼ばれてゐる。そのフィッシャーの教育法に據ると英吉利の義務教育は從來より長くなつて居る。これまでの法令では滿五才から滿十五才までの間に於て、地方官憲が地方の狀況に應じて適宜に義務教育年限を定むといふことになつて居つたので、處に依つては滿十五才の處もあるが、十四才の處もあり、それより少い處もあつたが、フィッシャーの法案は滿十四才までを義務教育とし、尙地方の狀況に依つては一年を延長することを得といふことになつて居る。これが實施されると、英吉利の義務教育年限は從來に比べて長くなる、尙その上に滿十八才までの義務補習教育をやらせるといふのであるから、非常な大

改革である。又佛蘭西の方でも義務教育はこれまで着せなかつたが、それを六年か八年の義務教育にしようといふことを運動して居て、これには理論上誰も異議はないやうであるが、金の出處が無いために議論ばかりで餘り捗らないけれども さういふ運動が盛に起つて居る。それから亞米利加の方は各州區々で義務教育年限は一定して居らぬ。亞米利加の義務教育といふものは曖昧であつて、州により年限が區々になつて、その上何才以上にして小學校の最終學年に相當した學力のある者は免除するといふやうな規則があつて、非常に不確實になつて居る。日本であると學齡に達すると何處の學校に入學すべしといふ書附を持つて來るが、亞米利加の方はちつともしない。世界大戰で動員をするために全國の壯丁を呼出して學力試驗をやつて見ると、驚くべき多數の無學者が發見された。亞米利加では自分の國では義務教育制度があつた筈だがどうして居つたのだといふ風にあきれたといふことである。百人中十六人の字の書けない者が發見されたといふので、

俄に義務教育を延長して徹底的にやるといふ運動が起つて居る。斯樣に各國とも義務教育延長の問題が起つて、日本でも八學年の運動が起つて來た。さうよると教員の學力が從來通りでは足りないといふことが考へられるから、師範教育の改造といふことが同時に問題になつて來るのである。それに就いては各國とも種々の議論があるが、議論の喧しい獨逸を例に引くと、獨逸は從來の師範學校は廢めてしまつて、師範教育は一般中等教育を基礎にして施すといふことになつて居る。故に一般中等學校を卒業した者を收容する處の師範學校といふものが出來なければならぬ、それを何處でやるかと云へば從來あつた大學の中で教員の養成をしようといふ主張もあり、又獨立の師範大學を造らうといふ主張もあり、其の年數等も區々であつて、餘り議論ばかりして居ると其のうちに教員數が不足しはしないかと思ふが、憲法が出來ると同時に從來の師範學校は廢めて居る。其代りになる者が出來ないのであるから恐慌を來す時期が來はしないかと吾々は感じて居る。

若し中等學校を卒業して更に四年の師範教育を受けることになると、これまでの大學で此の試驗を受けるために年數を澤山かけなければならなかつた醫科と同じやうになるから、小學校の教員の資格を得るために、醫術開業試驗を受けるのと同じ程度の試驗を受けなければならぬことになる。さうなれば小學校教員の給料も餘計かけなければならず、獨逸の財政が之に持堪へられるかどうか問題であるが、とにかく師範教育の程度を非常に高めるといふ議論がある。亞米利加では日本のやうな中等程度の師範學校と、中學校を卒業してから更に二年なり四年なりやる專門學校程度の師範學校と二種あつたが、やはり中等程度の師範學校は現在でも數は多いが、漸次專門學校程度の師範學校の數が增しつゝある、要するに、各國とも小學校教員養成に對しては、從來よりも多くの年數をかけるといふ傾向になつて居るのである。

第七節　異常兒童——教育病理學及治療教育學

異常兒童とは身體、或は精神の狀態が普通の兒童と異つて何か缺點を有つて居る子供のことである。此等の子供は普通の學校に入れて一緒に教育することは困難であるからして、特別の學校を設けて教育することになつて居るのである。此の方面の研究をすることは教育病理學の一である、それに伴つて治療教育學といふものがある。教育病理學は身體、或は精神の上に缺點を有つて居るものを調査して、其の狀態、其の原因等を研究する一の學問である。治療教育學といふのはそれに應じて適當な教育方法を應用する所の學問である。此の教育病理學と治療教育學とは共に教育と醫學との中間に位する特別の性質を有つて居る。それで從來の學校教育を中心として研究して居つた教育學の方面からのみ之を見るとは出來ない、同時に醫學の方から之を見なければならないのであるから、現在此等の

方面の研究に從事して居るものは兩方から出て居るのであるが、寧ろ醫學の方から出た人が多いのである。多くは小兒科の醫師、或は精神病學の人達が此の方面に就いて有益の研究をして居る。日本に於ては此の方面の研究に從事して居る人は、少くはあるがやはり精神病學の方と小兒科の方とあつて、各大學に於て相當此方面に立入つて居るやうである。東京の大學では三宅博士、福岡醫科では榊博士、大學に關係の無い人では富士川博士が殆ど專門として研究して居るやうであるが、これは吾々の側から見るよりは寧ろ醫學の側から見る方が實際に適當の研究が出來るのである。

盲—聾啞　異常兒童の中でも眼の見えない者、耳の聞えない者、隨つて言葉の出來ない者、卽ち盲、聾啞といふ二の者に對する敎育は、所謂敎育病理學、治療敎育學がまだ發達しないうちから、普通敎育に經驗のある人々が此方面のことをやつて居つたために異常兒童の中ではあるが、治療敎育學からは別物になつて居

る。併しこれもさう判然とは云へない、盲、聾啞になる原因を調べてそれを適當に處置して行くことになると、やはり敎育病理學や治療敎育學の方面から進んで行かなければならぬことが自然起つて來る。それで盲啞敎育に就いては既に相當の歷史があり、世間にも知られて居ることであるから餘り長く述べないことにして、その他の方面に就いて吾々の入り得る程度まで述べて見ようと思ふ。

結核兒　異常兒童の中に於て一つ問題になるのは結核性の兒童である。敎育の方でそれに對して如何なることをして居るかと云へば、種々なる方法があつて、其の敎育的事業を擧げて見ると、先づ第一には、普通の學校に入れて置いて他の子供と一緒に敎育することが出來るや否やといふことが一の境界になる。普通の子供と一緒に授業して大體差支ない程度の者であると、それは必ずしも別にしない。但し結核と云つても、他に傳染する虞のある者は當然隔離しなければならぬが、唯結核に罹り易い性質を有つて居る子供で、全體に虛弱であるといふやうな

子供に對しては種々の事をやつて居る、其の一としてはミルスタチオンといふことをやつて居る、これは墺地利等で行つて居る事で、直譯すれば授乳所といふやうなもので、前に述べた乳兒に牛乳を與へるやうな形であるが、それと異つて、郊外の森の中か何處か極く空氣の良い處に設けられてあつて、其處には特別に注意して取寄せた新鮮な牛乳が置いてある。さうして學校の教師が授業時間の途中で一時間なり一時間半なり休んで、虛弱の子供を集めて其處まで徒歩で出掛けるさうすると其の徒歩で行く間に自然に運動も出來、場處が森の中や何かで空氣の良い處であるから、其處に行くといふことがやはり一の有益な影響を與へることになる、而して其處で十分に休ませて上等の牛乳を飲ませる、さうしてそれが濟むと隊を組ませて連れて歸る。これなどは極く輕い程度の者であつて、唯だ全體として虛弱であつて、どうかすると結核に罹り易いやうな子供をさうしてやつて居るのである。其他に種々の異つた方法があるが、これよりもう少し程度の進ん

だ者に對しては、取扱ひ方を特別にしてやらなければならぬ、それからやはり略同樣の目的を以てやつて居るフェリエンコロニーといふものがあるが、これは獨逸語で、亞米利加ではヴェーケーションカンプと云つて居る、日本では森林に在ると森林學校、海岸に在ると海濱學校といふ名を附けて居る。併し日本でやつて居る森林學校或は海濱學校は、言語上では之に相當する獨逸のパルドシューレーとは稍々性質を異にする。フェリエンコロニーは暑中休暇中に轉地させるとを意味して居るから、自分は休暇轉地といふ名を附けた方が適當であらうと考へる。原語に拘泥せず、夏季兒童保養所といふ名稱も行はれてゐる。それは實際どういふ風にしてやつて居るかと云ふと、市町村の經費でやつて居る處もあるし、又有志家の寄附に依つてやつて居る處もある、又兩方併せてやつて居る處もあり、私の經營の處もあり、公の經營になつて居る處もあつて區々になつて居る。大體其の取扱方をシャルロッテンブルグあたりの例によつて申すと、平素子供の健康狀態

に就いて、學校の教師なり校長が注意して置いて、その次の暑中休暇に轉地させる必要のある者を表にして置いて、それを學校醫が一々調べて、さうして市町村役場なり、或は其の事務を取扱つて居る中央の本部に出すと、本部では適當にそれを審査して、必要と認める者を選出して、その年に轉地させる人員を定めるのである。その時には學校の教師が附添つて轉地するのであるが、それに校醫が附添ふならば好都合で、さもなければ轉地先の醫師が非常に骨を折つて居るやうである。その轉地をするには成るべく地形なり地勢なり氣候なりが異つて居つて、變化を與へるに最も都合の好いやうな場所を選んで居るやうである。例へば山間の子供は海岸に連れて行き、海岸の子供は山間に連れて行くとか、暖い處の者は涼い所に連れて行き、比較的涼しい處の者は暖い處に連れて行くやうになつて居るやうである。これは一體一種の慈善的の意味を有つて居る事業であつて、大抵子供の父兄からは極く僅の物しか取らないことにしてあつて、各の子供が著て行

く衣服とか靴とかノートブックの如きは、家庭から持出すこともあるが、大抵は公の費用、或は寄附に依つて實行することになつて居るやうである。中には餘程進んだ程度まで公費でやつて居る處があつて、向ふの設備は勿論、著物迄新しく拵へて與へる處がある。それには多少の意味がある。斯ういふ處へ來る子供は多くは貧家の子供であるから、衣服なども平素汚れたりして居るので、それを十分に消毒してやらなければならぬ。それには寧ろ轉地先の合宿所等に新しい衣服なり靴下なりを用意して置いて著せた方が宜いといふこともある。携帶品等も十分に清潔にして、心要な場合に於ては熱氣消毒等も行つて居る。食事は公費で賄つて居る處が多い。日本の林間學校若しくは臨海學校は趣が異つて居つて、別に體質の上から見て轉地を要するかどうかといふとは問題としてゐないやうである、さうして殆ど總ての場合費用は子供の家庭の負擔となつて居る、從つて貧乏人の子供は行くことが出來ないで、却つて中流以上の子供がそれに加つて行く、つま

り兩親に連れられて轉地することの出來る子供が、親と行く代りに學校から連れて行つて貰ふといふやうな形になつて居るのが多いのであつて、それから見ると大分趣が異つて居る。元來身體の虛弱な子供でなくてもさういふ處に行くのは良い事でもあり、又學校から連れて行くといふことも便宜であらうが、本來の目的を達するためにはやはり體質を考へて轉地の必要があるか否やを先づ審査して、而して貧乏人であつて自費で行くことの出來ない者には公費に依つて實行させるといふことの方が本來の趣旨に適つたやり方と考へて居る。此の他にも種々のやり方があつてフェリエンコロニーと林間學校との中間に位するやうなものが幾つもあるが、此の二を述べれば如何なる目的で行つて居るものであるかといふことが解るから、他は略々想像が附くわけである。

健康不良の程度がも少し進んだもので、普通の子供と一緒に置く事の出來ない者は、前に述べた林間學校とか、或は特に林間でなくて露天でやる露天學校といふものがある。林間學校は初め獨逸で松林の中でやつたので林間學校といふ名稱が附いたが、英吉利、亞米利加でやつて居るのは必ずしも林間でなくして、露天であるといふだけになつて居るものが多いので、露天學校と云うて居る。而してそれはどういふ工合にやつて居るかと云ふと、これには校醫が餘程重要の職務を有つて居る、これは平素學校の職員が注意して居つて、學校醫と協力して選出しやはり前と同じく諸方から出たものを中央の事務所に揃へて、その年々の林間學校、露天學校に入校すべき員數を定めて、來何月何日から何月何日まで其の學校に入れるといふことを定め、普通の學校から引離して入れることになつて居る。其處には附きりの專門の醫師があつて、始終子供の健康狀態に注意して居るのである。その林間學校露天學校といふものはどういふことをして居るかと云へば、普通の學校よりは科目を幾らか減じて、必要な學科だけを教へるやうにして、時間を少くして先づ子供の負擔を輕くし、此の間には運動をやらせたり、遊戯をや

らせたり、或は午睡をさせたりする、授業は天氣の好い限りは廣場に机を並べて露天でやり、雨天の日は天井と風あたりの強い方ばかりに板壁があつて外は明放しになつてゐる建物で授業をやつて居る。その學校の前庭には學校園や家畜舍が譯山設けられてあつて、授業の間にはそれ等の世話をさせて、自然に運動の出來るやうに仕組んである。而して此の林間學校、露天學校は公費でやつて居るものが多い。獨逸のシャルロンテンブルグの學校では、普通の平民學校に入つて居る者は無料、中等學校に入つて居る者は極く僅の實費を徴收して居る。これは短い處は二三ヶ月、長い處は半ヶ年位其處に入れて置いて、それから又普通の學校に歸すことになつて居る。これまでの報告に依ると、その間に非常に子供の體重が增し、健康の增進には著しく利益があるやうである。此の學校は時としては離れた場所に設けられない場合がある、斯かる場合には教室の或るものを之に代用して居る處があつて、露天學校でなくして露天教室と稱すべきものがある、これは英

吉利、亞米利加等の處々に在るが、丁度東京市内で云へば、大きなビルディングの屋上庭園のやうな處に机と椅子を並べて其處で授業をして居るのである。さういふ處では場處が變らないから、隨つて空氣が全く變るといふことは望まれないが、少くとも日光の能く當る處で授業をするといふことは餘程有益なやうである、これは間に合せの仕事であつて、徹底的のやり方としては郊外の空氣の良い場所に設くべきである。

此の他にもつと程度の進んだものがある。それは三ヶ月や半年入れて置いても到底普通の子供と一緒に授業を受けることの出來ないで、臥て居らなければならぬ子供があつて、更に特別の教育機關が必要になつて來る。それは獨逸ではキンダーハイルアンスタルトと云うて居る。ちよつと譯語に困るが、直譯すると子供の病院であるが、これは病院と學校とを兼ねて居る所の一の教育機關である。治療に最も都合の好い場處を選んで、病院と學校と兼ねたやうな設備をして、その

職員も教師と醫師との兩方から成立つて居つて、一方には絶えず診察をして治療を施しつゝ、一方に於ては附添醫の診斷に依つて、此の子供は一日二時間の授業に堪へるとか、或は三時間の授業に堪へるといふことを定めて、醫師の許した範圍に於て學科を教授して居る處で、これは餘程病氣の進んだ者の行く處である。

日本には極く數が少くて、其の一は千葉縣の船方町に在る東京市養育院分院、其處がそれに相當して居る。その船方町の東京養育院の分院は、開けた時期から云へば大分早かつたのであつて、明治何年頃か能く記憶しないが、獨逸の林間學校が起るよりも一兩年前に既に開らかれて居つたので、それが日本に於ける代表的のものである。もう一は神奈川縣の海岸に在る筈であるが、其所の樣子は餘りまだ報告されてゐないやうである。

此等の問題に就いて述べたいのは、現在行はれて居る所の林間學校或は海濱學校なるものが歐羅巴亞米利加に倣つて出來たものであるにも拘らず、歐羅巴亞米

利加でやつて居るものと大分意味が異つて來て、唯だ夏の間變つた處で授業をする、またその機會に異つた境遇に於て異つた經驗を得させるやうに傾いて居つて寧ろ下級社會の子供で病氣に罹り易いやうな體質を有つて居る者、或は既に結核の兆候が見え掛かつて居るやうな者が、其の恩惠に與つてゐないといふことである。一は金の關係からで、隨つて其の目的の上から見て多少他に外れて居るが、それ等は地方々々の情況に應じて適當に考へなければならぬと思ふのである。

不具者　此の不具者といふのは脊柱が彎曲して居る者とか、所々の關節が固定して居つて、手が伸びなかつたり、跛であつたりする子供である、それ等は普通の學校に入れて教育することが出來ぬから、特別に引離して教育して居る。如何なる原因で不具者が出て來るか、吾々が書物等で知つた所だけで云へば、勿論外傷のために起つて居る者もある、近頃自動車の數が多くなつて來ると、交通の危險から起つて來る者が漸次增加しつゝあることは容易く想像することが出來る。

けれども外傷に依つて起つた以外の原因者が却つて多いやうである。醫學者でない吾々にはよく判らないが、書物に書いてある所を見ると、遺傳性黴毒と結核のために起つた者が多いやうで、それ等に因つて起る關節炎が因となり身體に異狀を呈して居る者が少くない。此等の點から云うて、家庭の衛生及兩親の衛生を注意しなければ、此の問題は解決出來ないものであるといふことが書いてあるが、學校の教育から見て之を如何にするか、不具者の學校なるものを特別に設けて、やはり其處には醫師と教師の兩方から出た職員があつて、適當に之に治療を加へつゝ其の身體に應じた學科を授けるが、この場合には一種特別の要求が起つて來る。それは脚が曲つたり手が曲つたりして居る人は、迚も普通の子供と同樣に高等教育まで受けることは望みないことであるから、出來るだけ早く獨立の生活の出來る樣にすることが必要になつて來る、隨つて此等の學校は必ず一方に於て職業教育を授けて居るのである。その職業教育も普通の子供と同樣に行かない。身

體が不自由であるから特別の方法を取つて居るのである。腕の曲つて居る者には腕の曲つて居る者でも使へるやうな機械を工夫し、脚の短い者は脚が短くても使へるやうな機械を工夫し、普通の裁縫器械とか印刷機械とかとは異つた機械を使つて、それに依つて自分で生活が出來るやうな方法を講ずることになつて居るが此の方面の教育施設は、日本では洵に幼稚であつて、餘り行はれてゐないが、神田邊に鐵道關係者で出來て居るものが一つある、但しこれは子供でなくして大人の爲めである。鐵道等に從事して居る者は外傷の爲に不具になるものが多いのであるから、その救濟法の一として試みられて居るのであるが、子供のためには殆ど行はれて居らぬ、唯盲學校邊で試みにやつて居る。此の盲學校に入つて居る子供はやはり先天黴毒等に因つて侵されて居る者が割合に多いやうであつて、隨つて眼の惡い外に固疾の關節炎等を有つて居る者がある、隨て盲目といふことばかりでなく手足の故障を眼中に置かなければならぬことになる。斯の如き事業は諸

外國では餘程以前から行はれて、大分工夫がこらされて居つた。今度の大戰の結果として非常に澤山の癈兵が出來、その癈兵に對して職業を授けることが絶對必要になつたために、大人のためにさういふものを設けてやつて居る。その方法はこれまで子供の爲に設けて居る不具者の學校のやり方を基として工夫することとなつて、今度の戰爭から特別の意味をもつこととなつて來たのである。

低能童　これもやはり身體の故障から起つて居る者が隨分澤山ある。學校の成績の惡いといふことは、或は耳の聞えないために起つたり、視力が不十分であるために起つたり、或は子供の時に腦膜炎を患つたとか、腦水腫をやつたとかいふために起つたり、種々の原因があるが、低能兒教育といふものはやはり一の學校衛生の問題であるわけである。學校では之を如何に取扱つて居るかと云へば、そのために特別の學級を造つて居る處が多い。獨逸ではヒルフスクラッセと云うて居る、之を直譯すると補助學級であるが、之を普通の學校から集めて一の學校に

すると補助學校になる。補助學級を造るか、特別の學校を造るかは、その土地の狀況に依つて定まつて來るのであるが、若しそれが少數であるならば、一の學校の中に一の學級を設けることが便利である。其處ではどういふことをやつて居るかといふと、これに多少の變遷がある。最初此の問題が注意された頃には、學校で特別の教育法をやつたならば、幾分か治療して後には普通の子供と同じやうになりはしないかといふ希望があつたために、最初はさういふ方針で種々の事を試驗的にやつて居つたが、その方は餘り見込がない、低能兒は低能兒でやはり普通の兒童にはなつて來ない、故に之を治療して普通兒童に立歸らせることは餘り考へないで、低能兒は低能兒として或る程度までの教育を施す、殊に將來獨立の生活をするに都合の好い教育をすることになつて居る。斯の如き學校では國語、算術もやはり教へては居るが、普通の學校より程度の低いもので、而も劃一的に程度を定めることをしないで、子供の力に應じて進める所まで進めることになつて

居る、その他に行つて居るのは手工作業である、知能の遲れて居る者は段々智慧を引張出すのが都合が好い。一は將來の職業教育の準備としてやらせるといふことである。低能兒教育には尙一歩進んでは職業教育的のものが割合に餘計入つて居る。此事に就いては日本でも屢々試みられるが秩序的には發達してゐないやうである。

不良兒童　此の不良兒童なるものは一の大なる問題であると思ふ。その取扱ひ方に就いても種々立入つて述べると面倒なことがあるが、所謂不良兒童なるものは大抵精神上に缺陷を有つて居るばかりでなく、身體上の缺陷を有つて居る、昨年自分共の教室から神奈川縣に旅行した際に、小田原に在る幼年監獄を參觀したが、彼處の統計等を見ると、入監者の大部分は結核に冒かされて居る、身體の健康が害されて居ることが原因となつて、精神の發達の上にも異狀を呈して居る者が多いのである。若しさうであるとすれば其の教育の方法は精神の側からばかり

見ることは出來ないで、同時に身體の方からも見て行かなければならぬことになつて居る、隨つて醫家の問題となつて來るのである。それを現在如何にしてやつて居るかと云へば、程度に依つて種々のやり方があるが、何か惡い癖のある子供を發見すると、一の場處に集めてやつて居る處もある。日本では大體さういふやり方をして居る。矯正院とか少年院の如きものはそれに相當して居るのである。處に依ると一の場處に集めることは都合が惡いといふので、極く健全な家庭に委託して居る處もある。此の問題と少年裁判所の問題とは自ら關聯して居つて、此處にも醫家の側から見れば幾つかの問題があると思ふ。先づさういふ種々の問題があつて、それは所謂教育者許りでは手の附けられない、醫學的に之を見るべきことが多々あるといふことを概括的に述べるに止めて置く。最初近頃の教育は醫學と段々接近して來て、其方の助けを借らなければならぬことが多いと述べたのは前に述べた如き問題が多々あるからである。

第八節　成人教育

これまでの學校教育といふものは、普通教育であると、義務教育を八ヶ年乃至六年を卒へて、それに補習教育が附いて居るといふことであつたが、今日では尙進んで、一般の大人の教育をしなければならぬといふことが唱へられて、實際に於ても種々の施設が行はれて居るのである。殊に今回の大戰が餘程關係を有つて居るのである。大戰後獨逸ではフェルワクセネンエルチーウング、英吉利亞米利加ではアダルトエヂユケーションが盛に唱へられて來た。これは成人教育のことである。極く簡單に獨逸のやり方を述べて見ようと思ふ。一體此の成人教育と稱するものは、所謂社會教育、通俗講演といろ〳〵の名で行はれて居つたもので、開け始めたのは英吉利が一番早い。元來工業勞働者の爲に修養の機會を與へるといふ意味で最初始まつたもので、文學者のトマスカーライルとか、ジョンラスキン

といふやうな人が最初の運動者であつた。其の通俗教育が大學の仕事と結合してユニバーシチーエキステンションが起つた。日本では大學擴張運動と云うてゐる。つまり大學の力を大學の教室以外に及ぼして行かうといふのである。勞働區域の貧民窟等に行つて通俗教育をやるとか、音樂會をやるとか、家庭訪問をやつて居つた。今はさういふ貧民窟に永久的の集會所を設けてやつて居る、これが大學植民地である。英吉利、亞米利加の大學には、此の大學植民地を貧民窟の内に置いて居る處が多い、此の方法は他の國にも段々擴まつて來て、通俗講演等は處々でやつて居るが、その注意すべきものは大戰爭後の刺戟を受けて盛になつて來た獨逸の平民大學である、此の獨逸の平民大學は、それに先立つて丁抹に平民大學といふものがあつたことを考へなければならぬ。丁抹には前世紀の半頃、千八百五十年代に平民大學といふものが起つた。丁抹といふ國は昔かなり盛な國であつたに拘らず、段々國力が萎靡して來て他の國に壓倒されたことを憤慨した人が、教